

宮城県文化財調査報告書第199集

壇の越遺跡ほか

平成16年3月

宮城県教育委員会

序 文

新たな世紀を迎えるにあたり豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な土場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、平成15年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査成果と、開発工事に先立って事前調査及び確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成16年3月

宮城県教育委員会

教育長 白 石 晃

目 次

平成15年度発掘調査の概要

壇の越遺跡	1
瑞巌寺境内遺跡	57

例 言

1. 本書は宮城県が平成15年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係わる発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、遺跡の重要性から保存を前提として遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に際する機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。

3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。

4. 本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』(小山・竹原 1973) を参照した。

5. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。

6. 本書の座標値は日本測地系(改正前)に基づく平面直角座標第X系による。

7. 本書の遺跡記号は、種別にしたがって、以下の記号を使用した。

堀跡・柱列跡：SA、掘立柱建物跡：SB、溝跡：SD、井戸跡：SE、畑跡：SF、土壤：SK、道路跡・整地跡・切石列・その他性格不明の遺構：SX

8. 本書における道路跡の記述において、「側溝中心」は、側溝の上端間の中点を、「道路中心」は両側溝中心間の中点を意味する。

9. 本書は調査を担当した各調査員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成15年度発掘調査の概要 後藤秀一

壇の越遺跡 西村 力

瑞巌寺境内遺跡 白崎恵介

10. 調査成果について、研究会等での発表と本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

11. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

平成15年度発掘調査の概要

平成15年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費5,540千円、補助率1/2）による調査は、加美町所在の壇の越遺跡について、ほ場整備事業に伴う確認調査や遺跡保護の資料を得るために分布調査などを実施した。以下では、その調査の概要を記すことにする。

壇の越遺跡は、県営ほ場整備事業に伴って、平成8年度から加美町が主体となって発掘調査を実施してきている。昨年度までの調査では、遺跡の西半部で、北に隣接する東山官衙遺跡を基準とした南北・東西道路による方格地割の存在を発見している。このような官衙を中心とした方格地割は、古代における地方都市として捉えられており、国府以下の地方官衙では本遺跡以外には知られていない。地割は約1町（約100m）を単位とし、材木塀を周間に巡らせた内部に計画的に配置された建物群で構成される地割や、少數の建物跡の他、ほとんどが堅穴住居跡で構成される地割など、各地割の様相は変化に富んでいることが明らかになってきている。以上のような地割の他に、特筆される発見として、樁が付設された築地塀・材木塀も確認している。これらの区画施設は東山官衙遺跡が範囲を拡大した時の外郭区画施設である可能性が高いと考えられた。

遺跡の東半部を対象とした今年度の確認調査では、西半部と同様に、東山官衙遺跡の外郭南門跡から南へ続く南北大路を基準としている南北道路跡と東西道路跡を発見し、方格地割が段丘の東縁まで及んでいることを明かにした。地割内では、長方形にめぐらした解跡や、地割を4分割している区画溝跡を確認し、これらの塀の内側や、区画溝によって4分割された南西の区画に、建物跡が計画的に配置されている状況を確認するなど、地割の利用実体の一端も捉えることができた。

また、遺跡の東と東山官衙遺跡の北に隣接する丘陵部について、これまで土塁・空堀の存在が指摘されていたことから（宮崎町史編纂委員会1973）、これらの実体を把握する目的で分布調査を実施した。その結果、区画施設と考えられる土塁状の高まりや整地地業などを発見した。これらの遺構の性格、年代などについては今後の発掘調査を待たなければならないが、本遺跡で発見されている築地塀や材木塀と一緒に、東山官衙遺跡を囲んでいた可能性も考えられる。

以上のように、壇の越遺跡で発見した東山官衙遺跡を中心とした東西・南北道路による方格地割は、東に隣接する丘陵部でも確認できたことから、東西約1100m、南北約650mの広大な範囲に及ぶことや、地割内部を区画溝で4分割し、その一画では建物を計画的に建て並べている状況を把握した。また、遺跡に隣接する北と東の丘陵部では、壇の越遺跡と東山官衙遺跡を囲むような土塁状の高まりを数箇所で発見するなど、壇の越遺跡で発見した築地塀・材木塀の範囲を解明する上で必要と考えられる新たな知見を得るなどの大きな成果をあげることができた。

広大な遺跡の実体を把握し、遺跡の保護・活用を図っていくためには、さらに調査を継続して資料の蓄積を図る必要がある。

宮城県全図



壇 の 越 遺 跡

目 次

第Ⅰ章 調査経緯と遺跡の概要.....	3
1. 調査に至る経緯.....	3
2. 遺跡の概要.....	4
第Ⅱ章 確認調査.....	4
1. 調査方法.....	4
2. 基本層序と旧地形.....	7
3. 発見された遺構と遺物.....	7
39区.....	7
遺跡東部地区.....	28
第Ⅲ章 分布調査.....	32
1. 調査方法.....	32
2. 遺構分布.....	32
3. 遺物分布.....	33
第IV章 まとめ.....	36
引用・参考文献.....	43
写真図版.....	45

調 査 要 項

遺 跡 名：壇の越遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号：30040、遺跡記号：P N）

所 在 地：宮城県加美郡加美町鳥鳴ほか

調査原因：重要遺跡確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成15（2003）年4月7日～5月28日、11月14日～12月5日

平成16（2004）年3月24日

調査面積：39区 2,000m² 遺跡東部地区 1600m²

調 査 員：吉野 武・西村 力・田中政幸

調査協力：加美町教育委員会、加美郡西部土地改良区、宮城県古川産業振興事務所、
宮城県古川土木事務所

第Ⅰ章 遺跡の概要と調査に至る経緯

1. 遺跡の概要

壇の越遺跡は、宮城県加美町鳥嶋・鳥屋ヶ崎・谷地森に所在する。大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から南東に延びる丘陵の末端に沿って東流する田川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡は東西2km・南北1.5kmにおよび、標高は48~65mである。遺跡内は、北東側の上位段丘と南西側の下位段丘に大きく分けられ、比高差は2mほどである。本遺跡からは縄文から平安時代までの遺構・遺物が発見されているが、主体となるのは奈良・平安時代のものである。

遺跡のすぐ北側の丘陵上には古代賀美郡家と推定されている東山官衙遺跡がある(第1図)。この遺跡は、周囲に築地塀を巡らし、政府とその西側で整然と配置された倉庫群が発見されている。県北部では、奈良時代に律令国家の政治・軍事の拠点として造営された城柵・官衙遺跡として、中新田町の城生遺跡、古川市の名生館官衙遺跡、田尻町の新田柵跡、矢本町にある牡鹿柵・牡鹿郡家推定地の赤井遺跡などが知られている。古代加美郡は出羽国と接する陸奥国の西端にあたり、東山官衙遺跡は、



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	壇の越遺跡	丘頂	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	20	横川上の系遺跡	丘陵斜面	散布地	古石器・奈良・平安・古墳・古代
2	国史跡 東山官衙遺跡	丘陵裏	官衙・城柵	古墳後・奈良・平安・中世	21	斎原前駆遺跡	丘陵斜面	散布地	飛鳥・奈良・古墳・奈良・平安
3	早風遺跡	丘陵斜面	集落	縄文・中・晚・古墳・奈良・平安	22	地藏前遺跡	丘陵裏	散布地	日出器・飛鳥・奈良・平安・古代
4	国史跡 城生柵跡	丘陵	官衙・集落・城柵	縄文・中・晚・奈良・平安・中世	23	古城遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文早・前・古代
5	病沢遺跡	丘陵裏	散布地	古代	24	金山古墳群	丘陵	円墳・横穴墓	古墳後
6	長丸木遺跡	丘陵	散布地	古代	25	米朝前山大木墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
7	上空遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中・晚・古代	26	米朝城本丸遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古代
8	長村寺跡遺跡	丘陵	散布地	縄文・中・晚・平安・鎌倉・室町	27	古屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・中・晚・弥生・古代
9	天三ノ氣遺跡	丘陵	散布地	縄文・中・晚・平安・古墳・平安	28	中新田気条遺跡	自然堤防	散布地	縄文
10	鳥谷ヶ森古墳群	丘陵尾根	方墳	古墳後	29	三吉平遺跡	丘陵	散布地	飛鳥?・中・奈良・古墳?・古代
11	古道遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	30	萬森(大坂森)古墳	丘陵	円墳	古墳後
12	鳥谷ヶ森古墳群	丘陵	散布地	縄文・古墳	31	小堀古墳群	丘陵	散布地	飛鳥?・中・奈良・古墳・平安
13	愛宕山古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後	32	光庭古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳中
14	上の山遺跡	丘陵斜面	散布地	古墳・奈良	33	米朝遺跡	丘陵	散布地	古代
15	入八門古墳群	段丘	古墳	古墳中	34	羽瀬遺跡	丘陵	散布地	古代
16	尾の門堂遺跡	段丘	散布地	縄文中・晚・古代	35	礎前A遺跡	丘陵裏	散布地	古代
17	孫代れ山遺跡	丘陵斜面	円墳・方墳	古墳後	36	斯光寺へびぐる古墳群	丘陵	円墳・散布地	古墳後・古代
18	壇の越山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・中・古代	37	出羽通り遺跡	段丘	散布地	古代
19	上の原下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文?	38	大廻遺跡	丘陵	散布地	古代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(宮崎町教育委員会1999より転載、一部改変)

天平9（737）年に開削された陸奥・出羽を結ぶ道路が通っていた交通の要衝に位置している。

本遺跡では、これまでの調査で、東西・南北道路跡をはじめ、築地塀や材木塀からなる大規模な区画施設、塀や溝で区画された内部に、計画的に配置された建物群で構成される一郭などが発見されている。このような遺構の存在は通常の集落遺跡とは大きく異なっており、本遺跡は東山官衙遺跡と密接な関わりをもった遺跡であると考えられる。特に、地方官衙の周辺が道路によって方格に地割される例は、大宰府跡・多賀城跡・斎宮跡以外には知られておらず、壇の越遺跡と東山官衙遺跡は方格地割を持つ古代の地方都市遺跡として極めて重要であるといえる。

2. 調査に至る経緯

加美町の宮崎地区北部では、1996年度から大規模なほ場整備事業に取りかかっており、本遺跡の所在する谷地区・鳥嶋・鳥屋ヶ崎地区もその対象地区となっている。また、ほ場整備と並行して県道鳥屋ヶ崎・小野田線、柳沢・中新田線の改修・移設も計画されている。こうした状況を受けて宮崎町教育委員会と宮城県教育委員会は、遺跡の範囲、密度を把握するため、1996年度に場整備対象地区約1,278,000m²について確認調査を実施した。この確認調査をもとに関係者が協議をおこない、削平される部分を極力減らすなどの計画変更がなされた。

事前調査は1997年度から開始され、2002年度まで遺跡西～中央部を中心に、排水路、道路、切り土部分、仮排水路とその地域にかかる県道柳沢・中新田線の約105,000m²について調査がおこなわれている。

今回は重要遺跡確認調査として、遺跡東部を対象に確認調査をおこなった。調査は2004年度ほ場整備施行予定地区である39区の遺構の内容を明らかにすることおよび、遺跡東部における広範な遺構の分布状況を把握する目的でおこなわれた。また、壇の越遺跡周辺における関連遺跡の状況を把握するための分布調査もあわせて実施した。

第Ⅱ章 確認調査

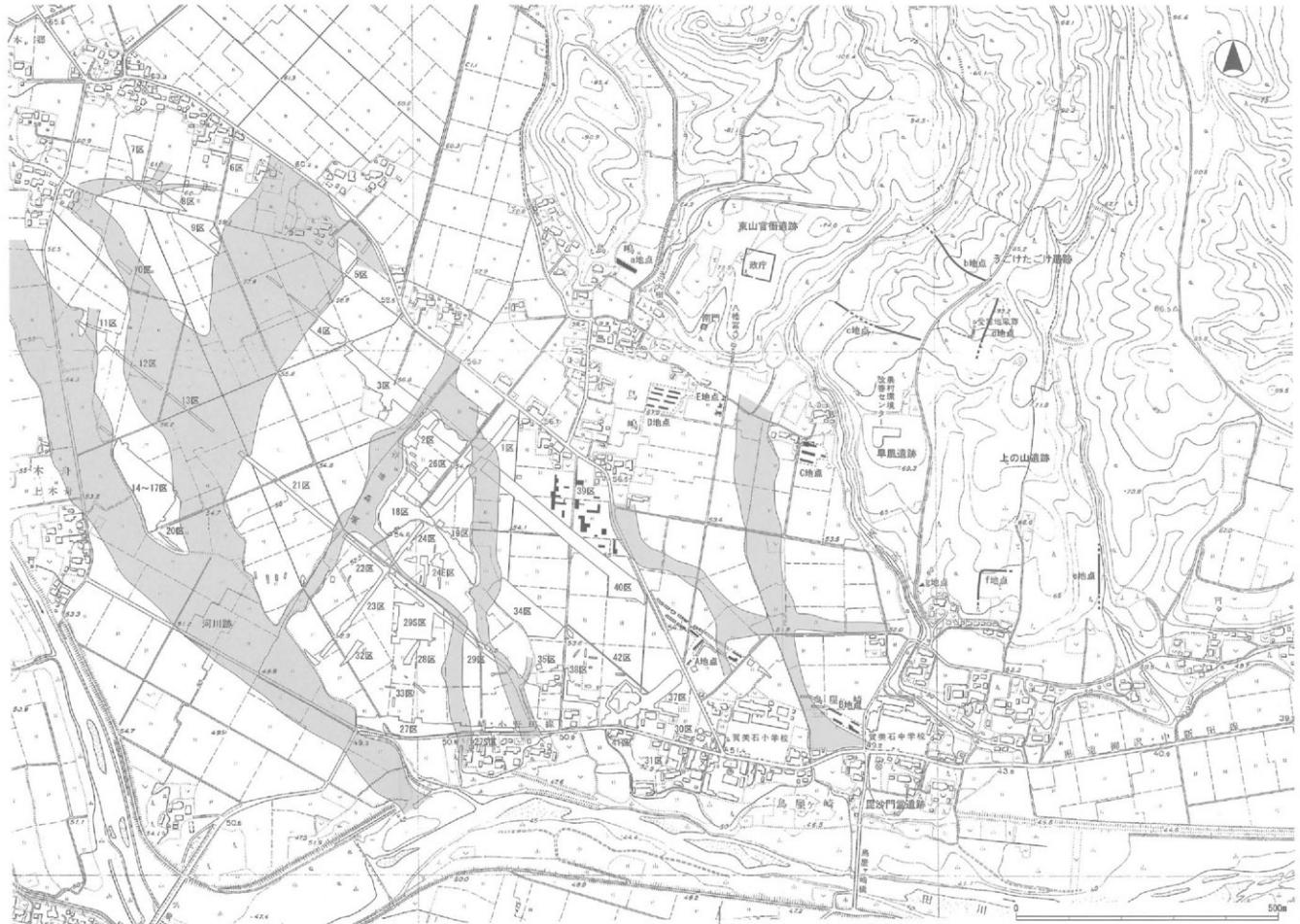
1. 調査方法

今回の調査は39区の確認調査と、遺跡東部の遺構分布調査に分かれる。

39区は、遺跡の中央東よりの地点で、県道柳沢・中新田線予定路線区の北側にあたる。2004年度ほ場整備施行予定地内にA～L区の計12の調査区を設定し調査をおこなった（第2図）。遺構の性格を把握するために必要に応じて精査を行っている。調査は2003年4月7日に調査を開始し、5月28日に終了した。調査面積は2000m²である。

遺跡東部地区では、県道予定路線地域内やほ場整備の際切り土となるA～Eの5地点に、計26本のトレンチを設定し調査をおこなった（第2図）。A・B地点は遺跡南東部に位置し、C地点は東山遺跡全面に広がる段丘面の北東隅に、D・E地点は東山遺跡南門跡から南に140m程に位置する。遺構の有無や広がりを把握することを目的としており、調査は遺構の表面検出にとどめた。調査は2003年11月14日から調査を開始し12月3日に終了した。調査面積は1600m²である。

調査にあたっては、表土を除去した後、遺構の検出、精査をおこなった。検出した遺構は、実測図



第2図 調査区の位置と周辺の地形

と写真撮影により記録した。39区については1/50平面図、1/20断面図を作成し、測量にあたっては国土座標第X系： $X = -155,951.5700$ 、 $Y = -3,200.2600$ を原点として用い、そこから東西南北の距離で示した。A～D地点については、基本的に1/250の平面図を作成し、一部1/100平面図を作成した。写真撮影には、35mmカラースライドおよびモノクロネガフィルム、 6×7 ネガフィルム、デジタルカメラを使用した。

2. 基本層序と旧地形

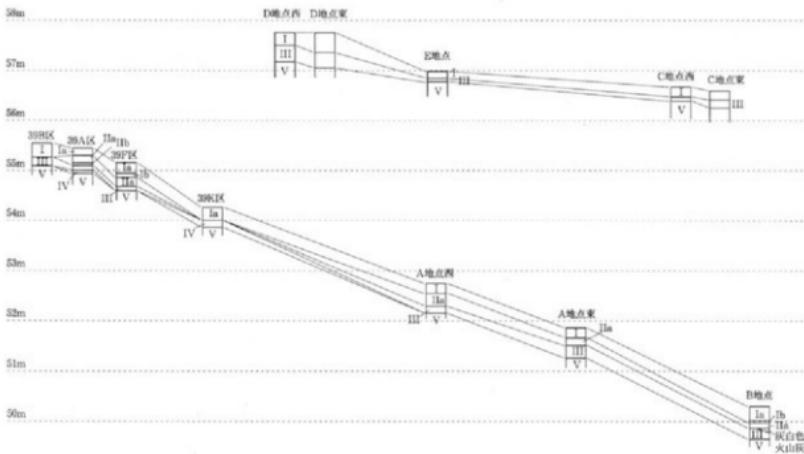
I層は暗オリーブ灰色（2.5GY3/1:a）や灰オリーブ色（7.5Y4/2:b）粘土で、現水田耕作土や床土である。II層は灰白色火山灰の粒やブロックを含む黒褐色（10YR3/2）シルト（IIa）の自然堆積層で、直下に灰黄褐色（10YR5/2）砂（IIb）の薄い堆積がみられる場合がある。III層は黒色（10YR1.7/1）粘土で、その上面が奈良・平安時代の遺構の掘込み面である。IV層は灰褐色（7.5Y5/2）シルトである。A・L・K区に分布する。V層は明黄褐色（10YR7/6）のシルトや粘土である。（第3図）

3. 発見した遺構と遺物

39区

A～L区を通じて、道路跡3条、材木跡2条、柱列跡3条、区画溝跡5条、建物跡10棟のほか、溝跡、烟跡、土壙、ピットなどを検出した。遺構の掘込み面はIII層上面である。

遺物は土師器、須恵器のほか、砥石や繩文・弥生時代の石器剥片などが出土している。奈良・平安時代の土師器、須恵器が主体であり、須恵器が大半を占める。



第3図 基本層序

(1) 道路跡

素掘りの側溝を伴う道路跡である。

E区でSX2600南北道路跡、B区でSX3000東西道路跡を検出し、A区でこれらの交差点を検出した。また、K区でSX2900東西道路跡の南側溝を検出した。

【SX2600南北道路跡】(第4・5・6図)

東西両側の道路側溝をA区で9.4m、E区で18m確認した。2時期の変遷が認められる。上面に路面上の堆積層と考えらるIIb層を確認したことから、路面はほぼ残存していた可能性がある。

側溝の規模はB期が上幅0.7~1.6m、下幅0.3~0.5m、深さ30~40cm、断面形は逆台形である。A期は、残存している部分で見ると上幅0.6~0.7m、下幅0.25m、深さ35cmで、断面形は逆台形である。堆積土はA・B期ともに黒ないし黒褐色土・粘質土・粘土の自然堆積土であり、B期の堆積土上層には灰白色火山灰粒が少量見られた。

道路幅はB期で見ると側溝心間で3.8~4.8m、道路跡の方向はE区の東側溝でN-4°-Eである。

遺物は、B期側溝の堆積土から土師器環・甕・須恵器環・甕が出土している。土師器環には製作にロクロを用いないもの（非ロクロ調整）と、用いるもの（ロクロ調整）がある。須恵器環には底部切り離し技法がヘラ切りで底部周縁や全面に軽いナデが施されるもの、静止糸切りで底部周縁に手持ちケズリが施されるものがある。また遺構確認時にも須恵器環・甕が出土し、須恵器環には底部切り離し技法が静止糸切りで底部周縁に手持ちケズリが施されるものや、回転糸切りで無調整のもの、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施されるものがある。

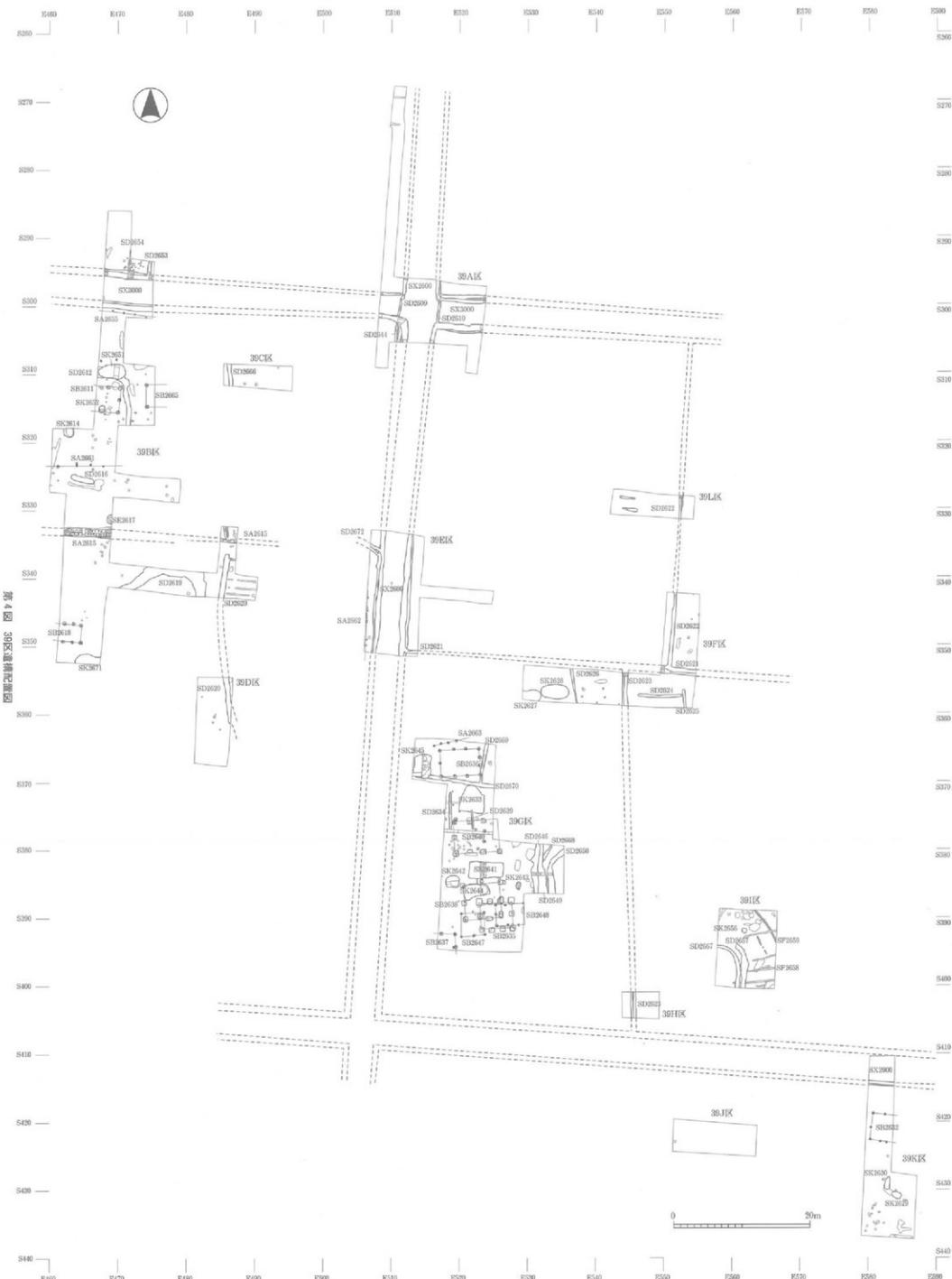
【SX3000東西道路跡】(第4・5・7図)

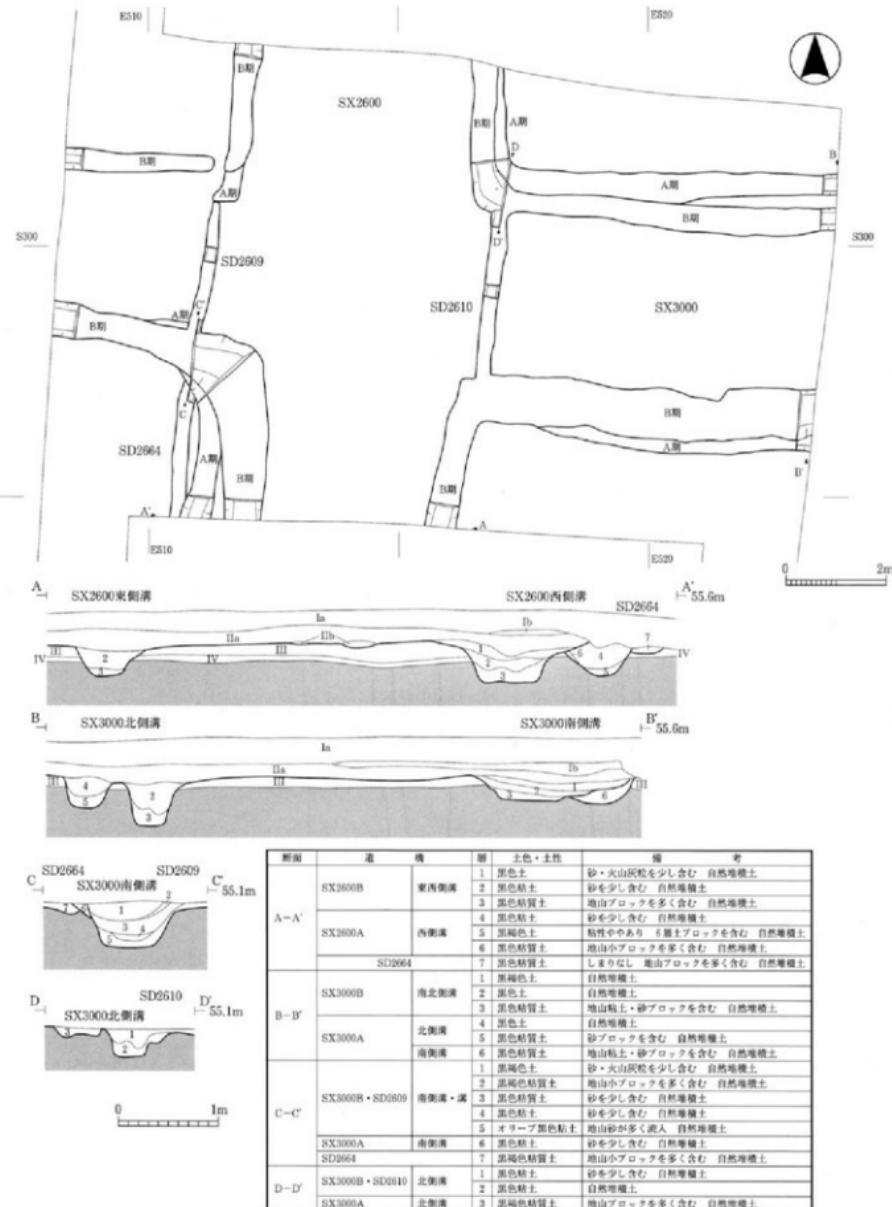
A区とB区北部を通る東西道路跡で、A区でSX2600道路跡と交差する。南北両側の道路側溝をA区で15.4m、B区で7.2m確認した。2時期の変遷が認められる。IIb層が確認されないことから路面は削平により失われているとみられる。

側溝の規模はB期が上幅0.65~1.65m、下幅0.3~0.6m、深さ20~45cm、断面形は逆台形である。A期が上幅0.5~0.7m、下幅0.25~0.3m、深さ25~35cmで、断面形は北側溝は逆台形で南側溝は皿状である。堆積土はA・B期ともに黒ないし黒褐色土・粘質土の自然堆積土である。

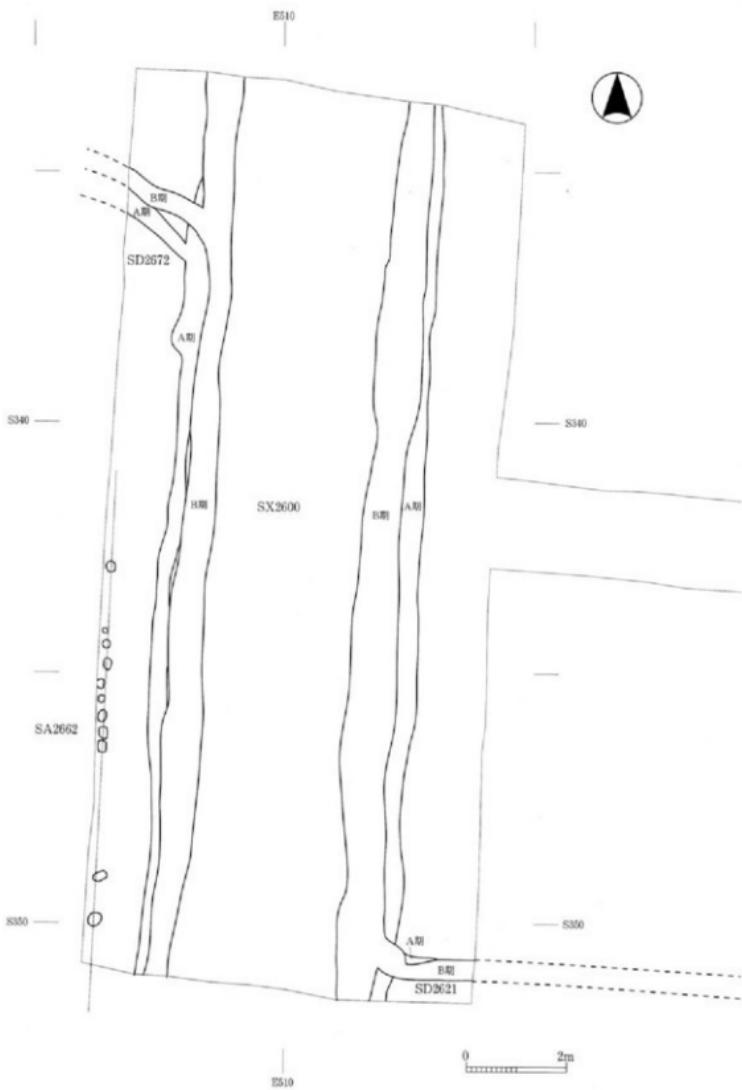
道路幅は側溝心間でB期が3.3~4.6mで、A期が4.5~5.0mで、道路跡の方向は、A区検出の北側溝でE-4°-Sである。

遺物は、B期側溝の底面から須恵器環（第8図3）が出土している。底部切り離し技法がヘラ切りで無調整、底面に「生」もしくは「主」の墨書がある。堆積土からは、土師器環・鉢・甕・須恵器環・高台環・蓋・鉢（第8図4）・甕・砥石が出土している。土師器環には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。ロクロ調整の環は、体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外傾し、内面は黒色処理が施されている。鉢はロクロ調整で内面は黒色処理が施されている。須恵器環には底部切り離し技法がヘラ切りで無調整のものやヘラ切り後ナデが施されるもの（第8図2）、体部下端から底部に手持ちケズリが施されその後ナデが施されるもの（第8図1）、底部全面に手持ちケズリが施されるものがある。砥石は砂岩製の板状のもので破片となっており、片面全体および側面の一部に磨滅

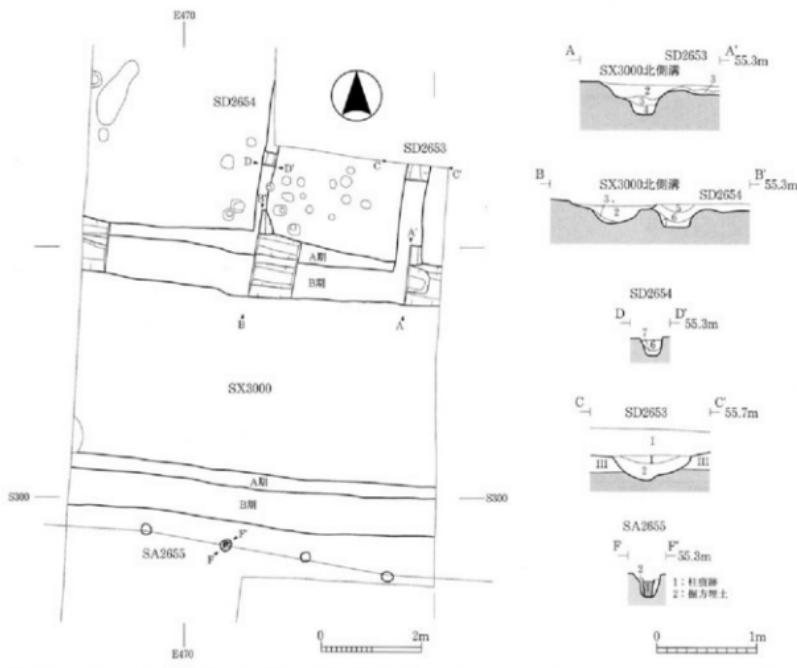




第5図 SX2600・SX3000道路跡平面図・断面図



第6図 SX2600道路跡平面図



第7図 SX3000平面図・断面図

が認められる。

【SX2600・3000道路跡交差点】(第5図)

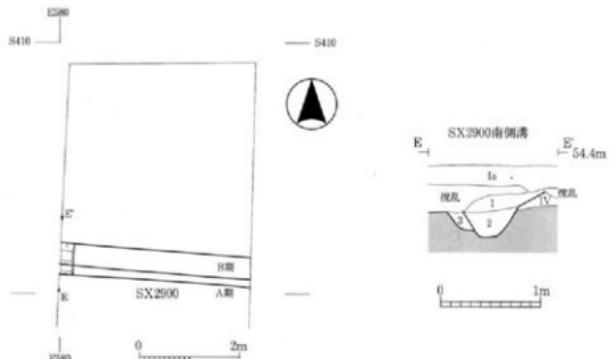
A区でSX2600・SX3000道路跡交差点を確認した。第5図に示したように、2本の道路跡の両側溝は交差点の四隅でそれぞれ「L」形に接続して十字路交差点を形成している。B期には、SX3000道路跡を横断して南北の側溝をつなぐSD2609(西側)・2610(東側)南北溝が新たに掘られている。これらの規模は、幅30cm、深さ3~8cmで、堆積土は黒色ないしオリーブ黒色の粘土で自然堆積土である。

【SX2900東西道路跡】(第4・8図)

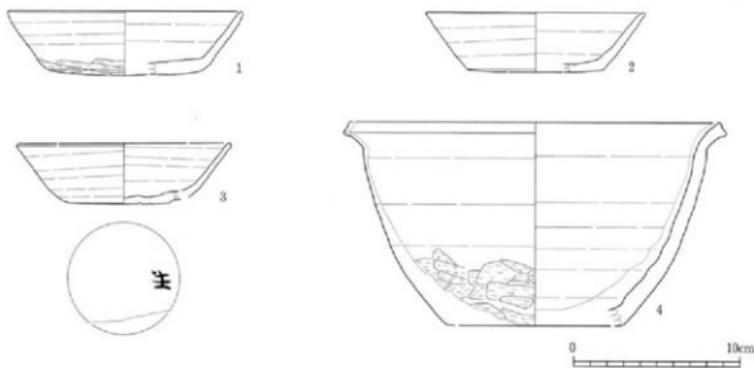
K区北端で検出した東西道路跡で、南側溝のみを3.8m検出した。2時期の変遷が認められる。

側溝の規模はB期が上幅0.8m、下幅0.2m、深さ40cm、断面形は逆台形である。A期は深さ20cmである。堆積土はA・B期とともに地山砂を含む、黒ないし黒褐色土・粘質土の自然堆積土である。

道路跡の方向はE-4°-Sである。



断面	造	構	層	土色・土性	備	考
E-E'	SX2900B	南側溝	1	黒色土	しまりなし	地山砂を少し含む 自然堆積土
			2	黒色粘質土	しまりなし	地山砂を少し含む 自然堆積土
SX2900A	南側溝	3	黒色粘質土	しまりなし	地山砂を含む	自然堆積土



No.	器種	遺構/周	残存	法量(cm)			特徴	写真図版	備註
				口径	底径	高さ			
1	須恵器 环	SX2900B南側溝 墓積上	1/3	(14.2)	(9.5)	3.9	内側：ロクロナデ 底：切り離し不明→手持ちケズリ	11-4	15
2	須恵器 环	SX2900B北側溝 墓積上	1/4	(13.2)	(8.1)	3.6	内側：ロクロナデ 底：へら切り→ナデ	11-5	10
3	須恵器 环	SX2900B北側溝 破面	1/3	12.9	6.9	3.7	内側：ロクロナデ 底：へら切り→底部に墨書き「主」or「隼」	11-6	09
4	須恵器 鍾	SX2900B南側溝 墓積上	1/3	(23.0)	(10.6)	12.2	外：ロクロナデ→底下部ケズリ 内：ロクロナデ	11-16	05

第8図 SX2900平面図・断面図および道路跡出土土器

遺物はB期側溝堆積土から須恵器壺・甕が出土している。須恵器壺は底部切り離し技法がヘラ切りでナデが施されている。

(2) 区画施設

A～H区で材木堀跡や柱列跡、区画溝跡の一部が検出されている。これらには数十メートルに渡って設置されているものもあり、道路による方格地割内部をさらに区画する施設や、区画を取り囲む施設とみられる。

【SA2615材木堀跡】(第9図)

B区を横断し東西方向に延びる材木堀跡で、その一部が西部で6.9m、東部で2.4m検出され、長さは25m以上である。SX3000東西道路跡中軸線から南に35mほどに位置する。B区西部では3時期の変遷が認められ、東部では1時期のみが認められる。材はいずれの時期のものも抜き取られている。

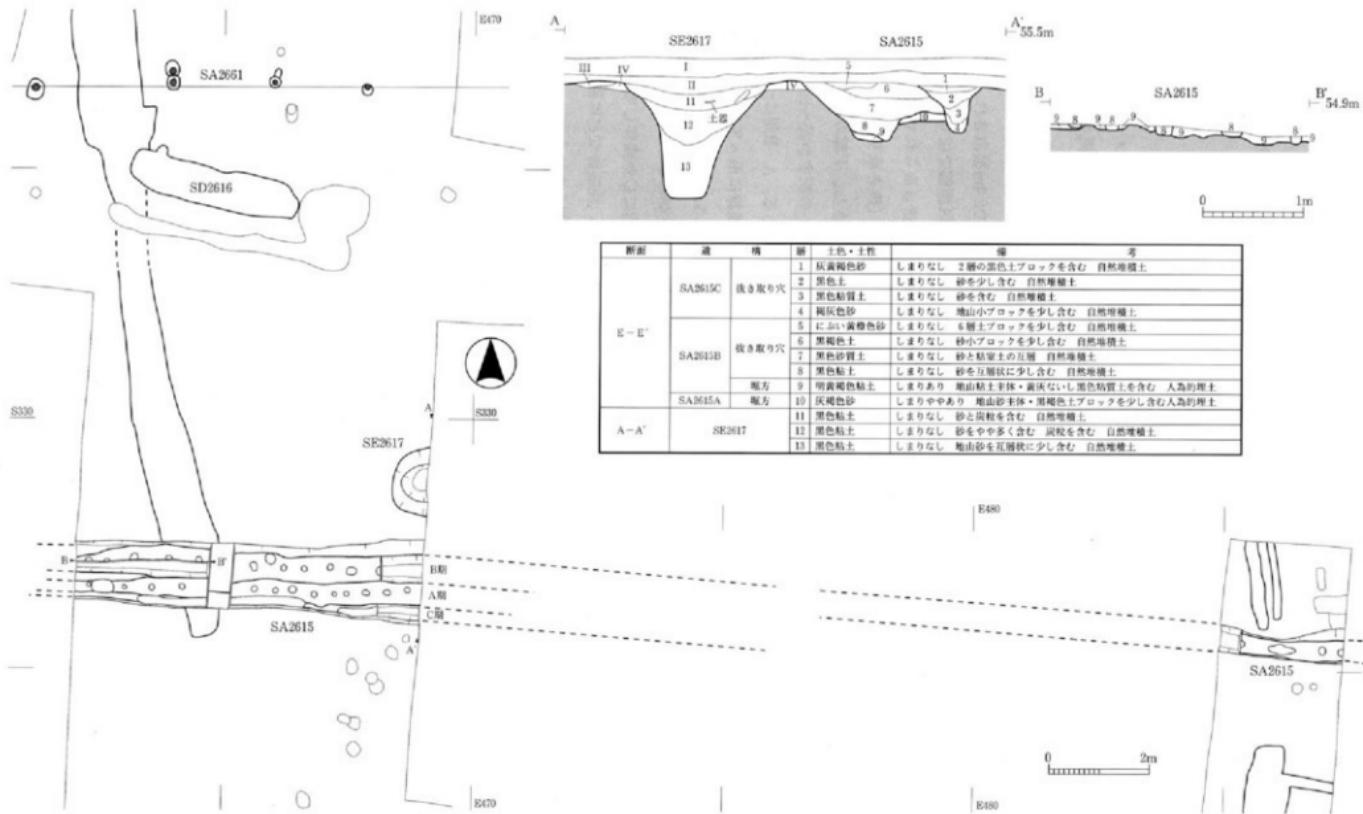
B区西部では、A～C期の掘方とB・C期の材を抜き取るために掘られた穴（抜き取り穴）を確認した。A・B期の掘方は、溝状に連続する抜き取り穴によって上部が大きく壊され、下部のみが残存している。掘方は溝状で、規模は、B期のもので幅40～70cm、遺構確認面からの深さが35～60cmであり、断面形は逆台形である。埋土はA期が灰褐色砂、B期が明黄褐色粘土である。A・B期については抜き取られた柱のあたり痕跡が認められ、直径10～20cm程の材が掘方の中軸線に沿って10～50cmの間隔で立て並べられていたと考えられる。方向はB期柱列でE-3°-Sである。B期抜き取り溝の堆積土は自然堆積であり、B期撤去後C期が構築されるまでには時間的な隔たりがあるとみられる。

C期の掘方は抜き取り穴によって底面まで壊されている部分が多く、部分的にしか残存していない。掘方の幅は10～25cmであり、遺構確認面からの深さは40cm前後とみられる。柱痕跡などは確認されなかった。C期はB期と時間的な隔たりがあり、掘方の規模もA・B期と比べ明らかに小さい。

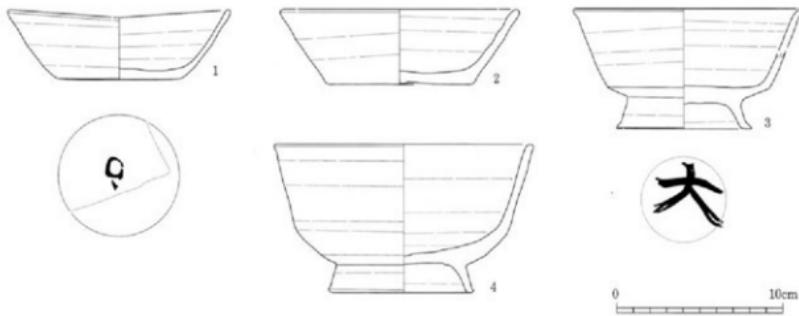
B区東部では1時期のみ確認されている。掘方は幅30～40cm、深さ15cmで、上部は抜き取り溝によって壊されている。材のあたり痕跡が認められ、直径15～20cmの材が35～80cmの間隔で立て並べられていたと考えられる。西部で確認したA～Cのどの時期に対応するのかは確定できないが、掘方の規模や構造、A～C期のなかでB期の掘方がもっとも深いことなどから考えると、B期に対応する可能性が高いと考えられる。

遺物は、B期抜き取り穴から土師器甕破片、須恵器壺・高台壺・甕が出土している。須恵器壺には底部切り離し技法がヘラ切りで、切り離し後にナデ調整を施すもの（第10図1）と無調整のものがある（第10図2）。前者の底部には「〇」状の墨書がある。また高台壺（第10図3）にも壺部底面に「大」の墨書がある。高台壺（第10図4）はSE2617堆積土からも同一個体の破片が出土している。C期の抜き取り穴からは須恵器壺が出土している。底部切り離し技法はヘラ切りで軽いナデが施されている。

また、後述するSA2662材木堀跡がB区の東に位置するE区で検出されている。SA2615はこれと一連である可能性も考えられる。



第9図 SA2615材木場跡平面図・断面図



第10図 SA2615材木堀跡出土土器

【SA2662材木堀跡】(第6図)

E区SX2600道路跡の西側溝の西側に沿って、南北方向に直線的に並ぶピット群を検出した。ピットの直径は10~30cm、密な部分では数センチ間隔でときれときれに7.3m程並んでいる。方向はN-3°-Eである。ピットには柱痕跡は確認できなかった。堆積土は砂粒を少し含む黒色土である。遺物は出土していない。

これらのピットは材木堀の柱材が沈み込んだ痕跡と考えられ、道路と地割内部を画するような跡跡の存在が推定される。また、前述したSA2615材木堀跡と一連の跡跡である可能性も考えられる。

【SA2655柱列跡】(第7図)

B区SX3000道路跡の南側に沿う東西方向の柱列跡である。規模は3間以上で、調査区内では長さ5.2m確認した。方向は、E-10°-Sである。柱間寸法は西から1.65、1.6、1.7mである。柱穴は平面形が方形ないし円形で直径25cm、深さ25cm、柱痕跡は直径10cm程の円形である。

遺物は出土していない。

【SA2661柱列跡】(第9図)

B区中央部で検出した東西方向の柱列跡である。規模は3間以上で、調査区内では長さ6.8m確認した。方向は東西基準線にほぼ一致している。柱間寸法は西から2.7、2.1、1.8mである。柱穴は平面形が方形ないし円形で直径20~40cm、柱痕跡は直径10~15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【SA2663柱列跡】(第12図)

G区北端部で検出した東西方向の柱列跡である。規模は3間以上で、調査区内では長さ3.5m確認した。方向は、E-11°-Nである。柱間寸法は西から1.05、1.05、1.25mである。柱穴は平面形が方形基調で一边30~35cm、柱痕跡は直径10~15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【SD2672区画溝跡】(第6図)

E区SX2900道路跡西側溝から分岐し東へ続く溝跡で、SX3000道路跡中軸線から南に36mに位置する。E区北西部で長さ1.7mを検出し、2時期の変遷が認められる。方向はB期でE-26°-Nである。

幅は、B期が35~45cm、A期が25~35cmである。堆積土は黒色土の自然堆積土である。

遺物は出土していない。

なおSD2672区画溝跡は、位置関係からSA2615材木場跡と一連である可能性もあるが、SD2672区画溝跡では掘方埋土と認定できるような堆積土は確認されなかったため、明確な対応関係は不明である。

【SD2653・2654区画溝跡】(第7図)

両溝跡ともB区SX3000道路跡北側溝から分岐し北へ続くもので、SX2600南北道路中軸線から西へ、SD2653が40m、SD2654が43mに位置する。SD2653はB期の道路側溝に接続し、SD2645はA期のものに接続していることから、道路側溝が改修される際にSD2653が位置を西へ3m移してSD2654を作り直されたとみられる。

SD2653は長さ2.2mを確認し、上幅が80cm、深さ25cm、断面形は皿状であり、堆積土は砂を少し含む黒色土ないし粘質土で、1層には灰白色火山灰が少量含まれる。方向はN-7°-Eである。遺物は出土していない。

SD2654は長さ3.0m確認し、上幅約25cm、深さ20cm、断面形は四角形を呈し、堆積土は砂や地山ブロックを含む黒色粘質土である。方向はN-8°-Eである。遺物は出土していない。

【SD2621区画溝跡】(第6・11図)

E区SX2600道路跡東側溝から東へ分岐し、F区でSD2622区画溝跡と接続する東西方向の溝跡である。SX3000道路跡中軸線から南へ51mに位置する。E区で1.9m、F区で5mを検出し、長は42.8m以上である。2時期の変遷が認められる。

規模は、B期で幅が70cm程、深さ30cm、A期の深さが20cmであり、断面形は両期とも逆台形である。堆積土はA期が地山主体のにぶい黄色土と灰黄褐色土ブロックないし地山粒を含む黒色粘質土、B期が黒褐色土や地山主体のにぶい黄色土、黒色粘質土で、いずれも自然堆積土である。

方向はE・F区で確認した北側上端でE-4°-Sである。

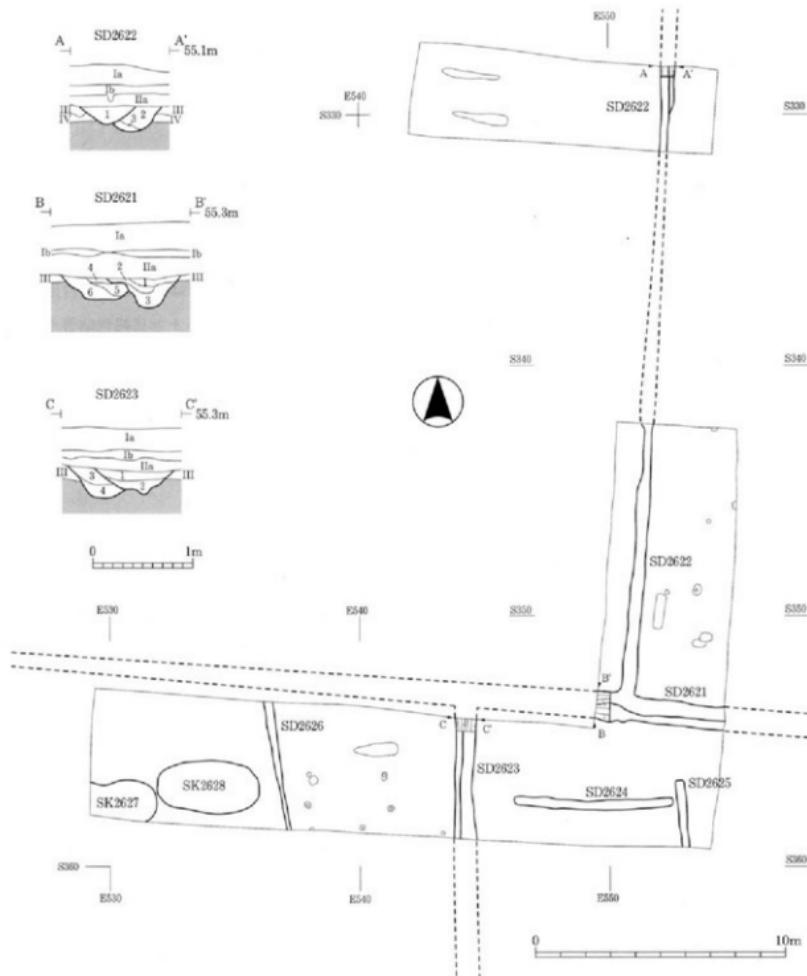
なおSD2621とSX2600東側溝の接続関係は、それぞれの新旧関係と対応している。また、SD2621区画溝跡は、B期にSD2622区画溝跡と接続している。

遺物は出土していない。

【SD2622区画溝跡】(第11図)

F区とL区で検出した南北方向の溝跡で、L区で2時期の変遷が認められる。F区では1時期のみ認められSD2621区画溝のB期に北から接続している。SX2600道路跡中軸線から東に約41mに位置する。F区で10.8m、L区で3.4m検出し、長さは25m以上である。

規模は、B期で幅30~60cm、深さ20cm、A期の深さが25cmであり、断面形は両期とも皿状である。堆積土は、A期が地山砂を含む黒色粘質土と地山砂主体のにぶい黄橙色砂、B期が地山砂を少し含む



断面	遺 墓	層	土色・土性	備 考
A-A'	SD2622B	1	黒褐色粘土質	しまりなし 地山砂を少し含む 自然堆積土
	SD2622A	2	黒褐色粘土質	しまりなし 地山砂を含む 自然堆積土
		3	にふい黃褐色砂	しまりなし 地山砂主体 自然堆積土
B-B'	SD2621B	1	黒褐色土	自然堆積土
		2	にふい黃褐色土	地山土主体 黒褐色土を含む 自然堆積土
C-C'	SD2621A	3	黒褐色粘土質	自然堆積土
		4	にふい黃褐色土	地山土主体 黑褐色土を多く含む 自然堆積土
	SD2623B	5	黒褐色粘土質	灰褐色土プロックを含む 自然堆積土
		6	黒褐色粘土質	地山砂を少し含む 自然堆積土
C-C'	SD2623A	1	黒色土	粘性あり 砂を少し含む 自然堆積土
		2	黒褐色粘土質	砂を少し含む 自然堆積土
		3	黒色土	砂を含む 自然堆積土
		4	黒褐色粘土質	砂を多く含む 地山砂小プロックを少し含む

第11図 SD2621・2622・2623区画溝跡平面図・断面図

黒色粘質土で、いずれも自然堆積土である。

方向はF区の東側上端でN-4°-Eである。

B期堆積土中から須恵器壺が出土している。

【SD2623区画溝跡】(第11図)

F区とH区で検出した南北方向の溝跡で、北でSD2621と、南でSX2600北側溝と接続するとみられる。SX2600道路跡中軸線からF区で東に34m、H区で東に39mの位置にある。F区で4.8m、H区で3.8mが検出され、長さは50m以上である。2時期の変遷が認められる。

規模は、B期で幅70~80cm、深さ25cm、A期の深さが30cmであり、断面形は両期とも逆台形である。堆積土は、A期が砂を含む黒色土と黒褐色砂質土で、B期が砂を含む黒色土と黒褐色粘質土で、ともに自然堆積土である。

方向はF区とH区のB期東側上端でN-1.5°-Wである。

遺物は、堆積土から須恵器壺・甕が出土している。須恵器壺には底部切り離し技法がヘラ切りでナデ調整のもの、底面に手持ちケズリ調整が施されるものがある。

(3) 建物跡

B・G・K区で掘立柱建物跡を検出した。特にG区では柱穴規模が比較的大きい建物が集中してみられる。ここでは代表的なものについて述べ、その他のものについては表にまとめて示した(第1表参照)。

【SB2611建物跡】(第4図)

B区中央部に位置する、東西2間以上、南北2間の建物跡で、西側は調査区外に続く。柱穴は5箇所検出した。

平面規模は東西が北側柱列で2.0m以上、南北が東側柱列で総長3.8m、柱間寸法は1.9m等間である。方向は東側柱列でN-6°-Eである。

柱穴は平面形が隅丸方形で、規模が一辺40~70cmである。深さは南東隅の柱穴で46cm、埋土は地山砂ブロックを多く含む黒色粘質土と地山粘土ブロックを非常に多く含む褐色砂である。4箇所で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径15~25cmの円形である。

遺物は出土していない。

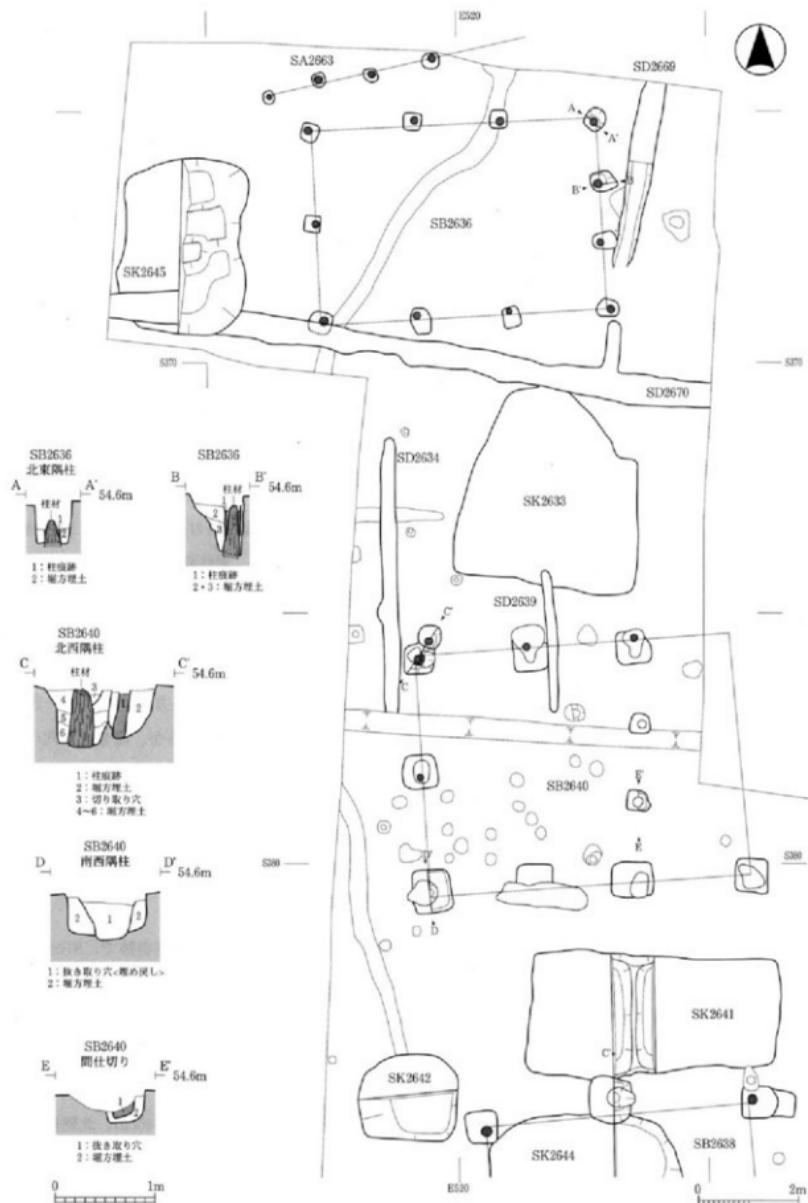
【SB2618建物跡】(第4図)

B区南部に位置する、東西2間以上、南北1間の東西棟で、西側は調査区外に続く。柱穴は6箇所検出した。

平面規模は桁行が北側柱列で2.5m以上、柱間寸法は東から1.2・1.3mで、梁行が東妻で2.5mである。方向は北側柱列でE-6°-Sである。

柱穴は平面形が隅丸長方形で、規模が一辺40~50cmである。深さは南東隅柱で52cm、埋土は地山粘土ブロックを多く含む黒色土である。全てで柱痕跡が認められる。柱痕跡は直径10~20cmの円形である。

遺物は出土していない。



第12図 39G区北半部遺構平面図・断面図

【SB2636建物跡】(第12図)

G区の北部に位置する、東西3間、南北が西妻で2間、東妻で3間の東西棟で、SD2669・2670より古い。全ての柱穴を検出した。

平面規模は桁行が北側柱列で総長5.8m、柱間寸法は西から1.9・1.9・2.0mで、梁行が西妻で総長3.8m、柱間寸法は西妻で1.9m等間、東妻で北から1.3・1.2・1.3mである。方向は北側柱列でE-3°-Nである。

柱穴は平面形が隅丸方形ないし隅丸長方形で、規模が一辺40~50cmである。深さは北東隅柱で40cm、埋土は、地山粘土ブロックや砂を含む黒褐色土、黒色土、黒色粘質土などである。東妻の北側2箇所の柱穴では柱材を、その他では柱痕跡が認められる。柱材断面形および柱痕跡は直径10~15cmの円形である。遺物は出土していない。

【SB2640建物跡】(第12図)

G区の中央に位置する、東西3間、南北2間の東西棟建物跡で、SD2639より古い。東妻より西へ1間に目間に仕切りを持つ建物跡で、柱穴は北東隅と東妻棟通り下の2つをのぞく8箇所検出した。

平面規模は桁行が南側柱列で総長6.6m、柱間寸法は西から4.4m（2間分）・2.2mで、梁行が西妻で総長4.8m、柱間寸法は2.4m等間である。方向は南側柱列でE-4°-Nである。

柱穴は平面形が隅丸方形で、規模が一辺60~90cmである。深さは北西隅の柱穴で55cm、南西隅の柱穴で40cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土、黒褐色粘土、黒色粘質土、および地山粘土主体の明黄褐色粘土などで、一部グライ化している。3箇所で切り取り穴、4箇所で抜き取り穴を検出している。北西隅柱穴では柱材を検出し、3箇所で柱痕跡を確認している。柱材断面形および柱痕跡は直径15~25cmの円形である。

間仕切りの柱穴は2箇所で確認している。間仕切りの柱穴は平面形は隅丸方形で規模は一辺約40cmである。深さは25cm、埋土は黒褐色砂質土ある。柱材は抜き取られているが、抜き取り穴の底面で径20cmの円形を呈する柱のあたり痕跡が認められた。

遺物は、切り取り穴堆積土から須恵器蓋の破片、土師器片が少量出土している。

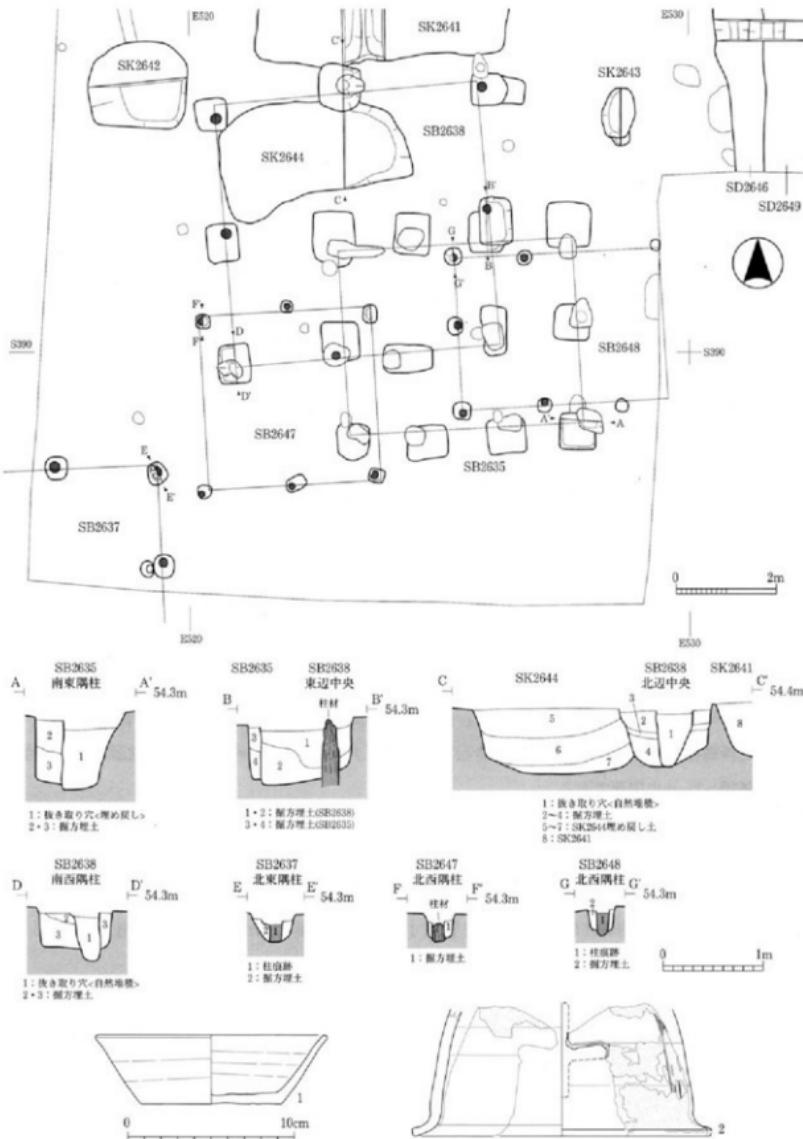
この付近で最も平面規模の大きい建物であり、柱穴の掘方も大きく整っており、柱材も直径25cmのものが確認されていることなどから、中心的建物であった可能性も考えられる。

【SB2638建物跡】(第13図)

G区南部に位置する、東西が北側柱列で2間、南側柱列で3間、南北2間の建物跡で、SB2635・SK2641・2644より新しい。全ての柱穴を検出した。

平面規模は東西が北側柱列で総長5.4m、柱間寸法は西から2.6・2.8m、南側柱列で総長5.4m、柱間寸法は西から2.1・1.1・2.2m、南北が西側柱列で総長5.1m、柱間寸法は北から2.4・2.7mである。方向は西側柱列でN-5°-Wである。

柱穴は平面形が隅丸長方形で、規模が一辺60~90cmである。深さは南西隅柱で40cm、北側柱列中央、東側柱列中央で60cmである。埋土は、地山粘土ブロックや砂を含む黒色粘質土、黒色粘土、および地山粘土主体の明黄褐色粘土などで、一部グライ化している。5箇所で柱痕跡を確認し、その他の柱穴では柱は抜き取られている。柱材断面形および柱痕跡は直径15~20cmの円形である。



第13図 39G区南半部遺構平面図・断面図・出土遺物

No.	器種	遺構/層	残存	法量(cm)			特徴	写真図版	色鉛
				口径	底径	高さ			
1	須恵器 环	SB2638 東妻掛下柱穴側方	1/3	(14.0)	8.5	4.2	内外：クロコナギ底：ハラ切り 内外面に丸だらぎあり	11-9	38
2	須恵器 円筒罐	SD2646 道幅標記	脚部1/4	-	(18.0)	-	内外：クロコナギ→透かし・浅縞→自然縞→横けハジケ	11-17	49

遺物は、柱穴埋土から須恵器环や、須恵器蓋・坏・甕が出土している。須恵器环には底部切り離し技法がヘラ切りで無調整（第13図1）のものや、底部全面に回転ケズリが施されているものがある。抜き取り穴堆積土中からは、須恵器坏、非ロクロ調整の土師器片が少量出土している。須恵器坏の底部には丁寧なナデ調整が施されている。

【SB2635建物跡】（第13図）

G区の南部に位置する、東西3間、南北2間の東西棟で、SB2638より古い。柱穴はSB2638によって壊されている西妻棟通下を除く9箇所検出した。

平面規模は切り取りないし抜き取り穴の状況から柱位置を想定すると、桁行が南側柱列で総長4.6m、柱間寸法は西から1.4・1.7・1.5mで、梁行が西側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.6・2.1mである。方向は南側柱列でE-3°-Nである。

柱穴は平面形が隅丸方形で、規模が一辺70~110cmである。深さは南東隅柱で65cm、北側柱列東端から2個目で55cm、埋土は地山ブロックを多く含む黒色粘質土である。いずれにおいても切り取りもししくは抜き取り穴が認められ、東妻棟通下では柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径15~20cmの円形である。遺物は出土していない。

【SB2648建物跡】（第13図）

G区の南部に位置する、東西3間以上、南北2間の東西棟で、東側は調査区外へ続く。柱穴は7箇所検出した。

平面規模は桁行が北側柱列で総長4.1m以上、柱間寸法は西から1.4・2.7（2間分）で、梁行が西側柱列で総長3.1m、柱間寸法は北から1.3・1.8mである。方向は北側柱列でE-3°-Nである。

柱穴は平面形が隅丸方形ないし円形で、規模が一辺30~40cmである。深さは北西隅柱で25cm、埋土は北西隅柱で地山土・砂ブロックを含む黒褐色粘質土である。5箇所で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径10~15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【SB2647建物跡】（第13図）

G区の南部に位置する、東西2間、南北1間の建物跡で、全ての柱穴を検出した。

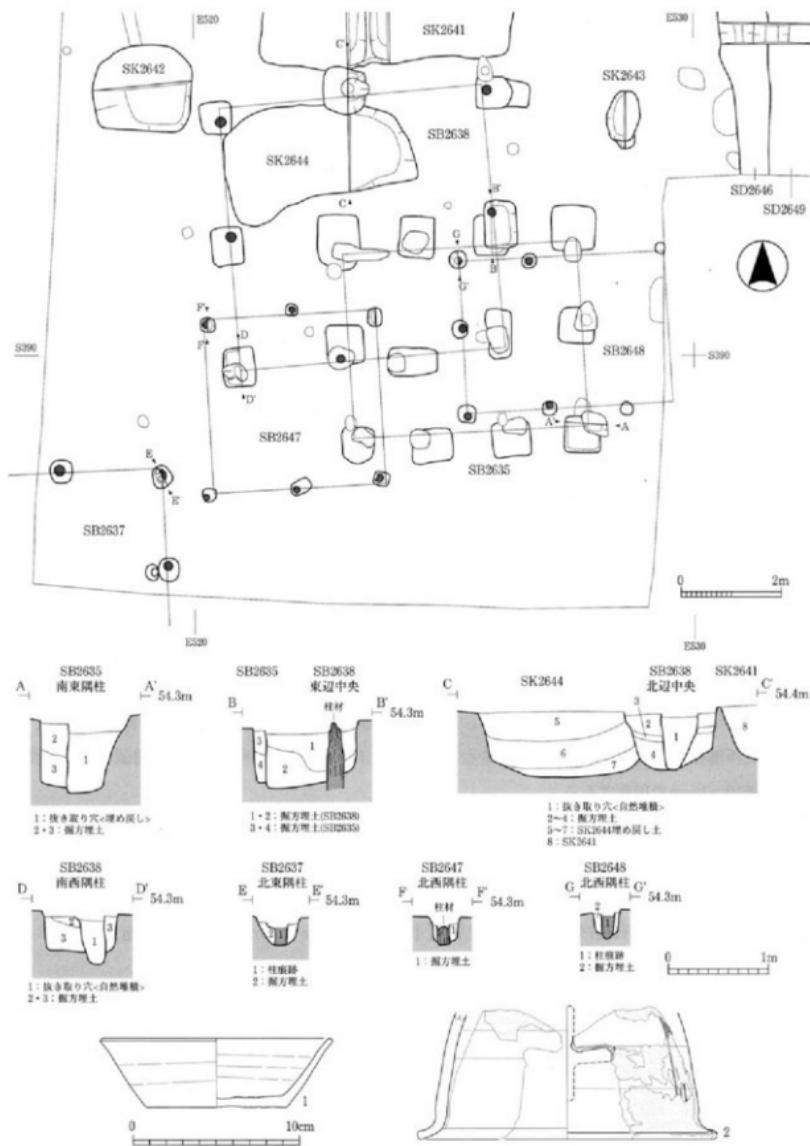
平面規模は東西が南側柱列で総長3.5m、柱間寸法は西から1.8・1.7mで、南北が西側柱列で総長3.4mである。方向は南側柱列でE-6°-Nである。

柱穴は、平面形が隅丸方形で、規模が一辺25~45cmである。深さは北西隅柱で25cm、埋土は地山粘土・砂ブロックを多く含む黒色粘質土である。全てで柱痕跡を検出した。柱痕跡は直径10~20cmの円形である。

遺物は出土していない。

(4) その他の遺構

その他の遺構としては、井戸跡、溝跡、土壙、烟跡を検出している。溝跡には弧状に巡るもの、直線的なものなどがあり、土壙には平面形が長方形や梢円形、不整形を呈するものがある。また、溝跡



第13図 39G区南半部遺構平面図・断面図・出土遺物

や土壤には人為的に埋め戻されているものもみとめられる。ここでは代表的なものについて述べ、その他のものについては表にまとめて示した（第2表参照）。

【SE2617井戸跡】（第9図）

B区の中央部の東壁際で検出した素掘りの井戸跡で、井戸跡西半を検出した。

口平面形は直径190cmの円形で、底部径は40cm、深さ110cmで、断面形は漏斗状である。

堆積土は、砂粒と炭粒を含む黒色粘土と地山砂を互層状に含む黒色粘土の自然堆積土である。

遺物は、堆積土中から須恵器壺・壺片が少量出土している。須恵器壺は底部切り離し技法が静止糸切りで体部下端から底部周縁にかけて回転ケズリが施されている。

【SD2612溝跡】（第4図）

B区の中央北寄りで検出した溝跡で、SK2651より古い。調査区外の南から北へ向かって延び弧状に西へ向きを変え調査区外へ延びる。

長さは11m以上、溝の幅は60～160cmである。堆積土は、黒褐色粘質土ブロックを含む黒色土で、自然堆積土である。

遺物は堆積土中から土師器片が僅かに出土している。

【SD2619溝跡】（第4図）

B区の東側拡張区で検出した弧状に巡る溝跡で、溝跡北部を検出した。大半は調査区外に続く。

長さは15m以上、幅は100～220cmで変化が大きく輪郭は不規則である。弧の内径は9m以上で、弧の内側でビットが1基検出されている。

遺物は、須恵器壺や土師器片などが出土している。

【SD2646溝跡】（第4図）

G区の東部で検出した南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ続く。SD2649より新しい。方向はN-2°-Eである。

規模は、長さが7.3m以上で、上幅は50～100cm、断面形は皿状で深さは24cmである。堆積土は地山ブロックを含む黒色粘質土や暗褐色砂質土で、自然堆積土である。

遺物は須恵器壺・蓋・壺・高台壺・甌、土師器壺・壺が出土している。須恵器壺（第13図2）は脚部が出土し、十字形の透かしと、縦方向の3本の平行する沈線が4単位配置されている。須恵器壺には底部切り離し技法がヘラ切りでナデ調整が施されるものがある。土師器壺には非ロクロ調整で内面に黒色処理が施されているものがあり、土師器壺にはロクロ調整で内面に黒色処理が施されているものがある。

【SK2641土壤】（第12図）

G区の中央西よりで検出した土壤で、SB2638より古い。

平面形は長方形で、長さ5.0m、幅2.6m、深さは60cmであり、断面形は逆台形である。中央付近を一部掘り下げるところ、底面を南北に横切る14～18cmほどの高まりを検出した。

堆積土は地山砂小ブロックを多く含む黒色粘質土と地山砂ブロックを多く含む黒色粘土で、人為的に埋め戻されていた。

遺物は、埋土中から須恵器坏・壺片・土師器片などが出土した。須恵器坏には底部切り離し技法がヘラ切りで底部全面に軽いナデ調整が施されるものがある。

【SK2645土壤】(第12図)

G区の北部で検出した土壤で、SD2670より古い。

平面形は不整な梢円形で長さ3.5m、幅2.6mである。底面は凹凸があり、深さは深いところで65cmである。堆積土は、地山ブロックを含む黒色粘質土や褐色砂、オリーブ灰色粘土で、自然堆積土である。

遺物は須恵器坏・壺・壺が出土している。坏には底部切り離し技法が静止糸切りで底部周縁に回転ケズリが施されるものや、底部切り離し技法がヘラ切りで手持ちケズリ、ナデが施されるものがある。

【SF2658・2659細跡】(第4図)

I区東半に分布する烟跡で、歎跡とみられる平行する小溝跡群を検出した。SF2658はSF2659より新しく、SD2657より古い。

SF2658は、方向がE-5°~6°-Nのものや、E-12°-Nのもの、E-18°-Nのものがあり、数時期の変遷を経ているものとみられる。溝跡の幅は10~30cmで、長さは長いもので6.2m以上である。溝跡の間隔は同時期と考えられるもの毎に見ると1.2~3.5mである。

SF2659は、方向がN-30°-Wで、溝跡の幅は20~25cmで、長さは長いもので5.5m以上である。溝跡の間隔は2.1mである。

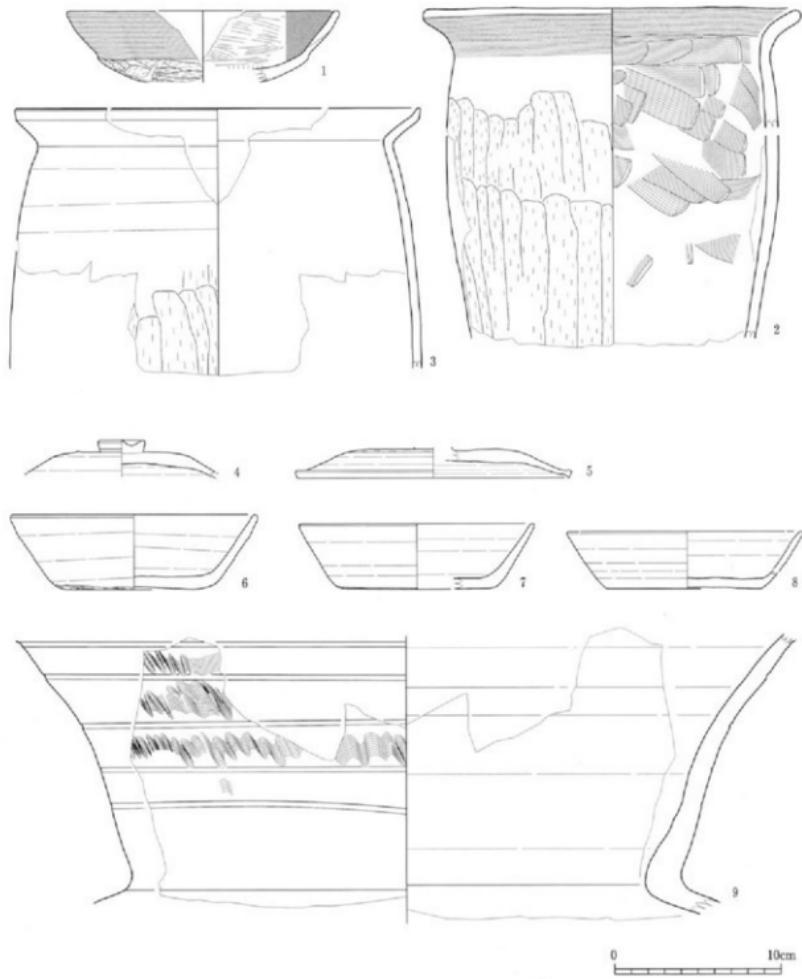
遺物はどちらからも出土していない。

(5) その他の出土遺物

本文中に取り上げなかった遺構や、遺構確認面、表土からも遺物が出土している。古代の土師器、須恵器が主体で、他に縄文・弥生時代の石器剥片が数点出土している。

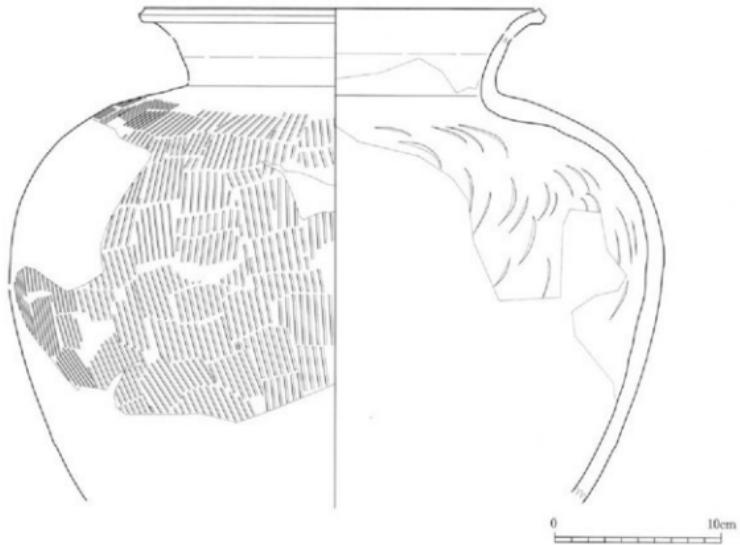
土師器は坏・椀・鉢・壺が出土している。非ロクロ調整の坏には、丸底で外面に段があり、内面は黒色処理が施されているものがある(第14図1)。椀は底部破片が出土し、平底で、体部外面から底面にかけて手持ちケズリが、内面には黒色処理が施されている。鉢は底部破片が出土し、外面にはナデが施され、内面には黒色処理が施され、底面には木葉痕がみられる。椀・鉢は非ロクロ調整である。壺は非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。非ロクロ調整のものには、長胴形で、口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面には縦方向のケズリ、体部内面にはヘラナデが施されるものがある(第14図2)。ロクロ調整のものには、長胴形で、口縁部外縁が垂直に立ち上がり、体部外面にケズリが施されるものがある(第14図3)。

須恵器は坏・高台坏・蓋・鉢・壺・壺が出土している。坏には、底部切り離し技法が静止糸切りで体部下端から周縁に手持ちケズリが施されているもの(第14図6・7)、底部切り離し技法がヘラ切りで無調整のもの(第14図8)などがある。蓋には器高が低く口縁端部が下方に折れるものがある(第14図5)。壺には、体部外面は平行タタキが施され、内面には無文の当て具痕跡がみられるものや(第15図)、大型で、頸部に横方向の5本の平行する沈線が描かれ、間に波状文が配されているものがある(第14図9)。



No.	器種	遺構/層	残存	法量(cm)			特徴	写真図版	登録
				口径	底径	高さ			
1	土師器 手	SK2630	1/4	(16.0)	(12.0)	(4.3)	外：ロクロナデ 内：ヘラミガキ→黒色処理 底部：手持ちケズリ	11-1	66
2	土師器 壺	K区 灰土	1/4	(22.7)	-	(20.2)	外：ナデ→手持ちケズリ 内：ナデ・ヘラナデ	12-1	65
3	土師器 壺	SK2633	1/6	(24.6)	-	(16.0)	外：ロクロナデ→棒筋ケズリ 内：ロクロナデ+ナデ	12-3	32
4	須恵器 直	G区 遺構確認	1/3	-	-	-	内：ロクロナデ つまみ部径：1.4cm	11-2	34
5	須恵器 直	K区 灰土	1/3	(16.0)	-	(1.7)	外：ロクロナデ→棒筋ケズリ→フサ 1取り付け→ロクロナデ 内：ロクロナデ	11-3	62
6	須恵器 手	SK2645 遺構確認	1/2	14.8	8.2	4.5	外：ロクロナデ 底：静止水切り→手持ちケズリ+ナデ	11-10	46
7	須恵器 手	I区 遺構確認	1/4	(14.1)	(9.7)	4.5	内：ロクロナデ 底：静止水切り→手持ちケズリ	11-12	57
8	須恵器 手	SK2651 2層	1/2	(14.2)	9.5	3.5	内：ロクロナデ 底：ヘラ切り	11-11	28
9	須恵器 壺	SK2627 陶粘土	頭部	-	-	-	外：ロクロナデ+紡錘・波状文 内：ロクロナデ・縞模様：33.8cm	12-2	08

第14図 その他の出土遺物(1)



器種	遺構/層	残存	法量(cm)		特徴	写真図版	登録
			口径	底径			
直底器 壺	SX2614 地盤土	1/3	(33.7)	—	外：平行クタキ・ロクロナデ 内：無文当て具・ロクロナデ	12-6	21

第15図 その他の出土土器(2)

遺跡東部地区

遺跡東部の南北650m、東西450mの範囲に設定されたA～E地点を調査し、道路跡5条をはじめ掘立柱建物跡19棟、井戸跡1基、溝跡、土壌などを多数検出した。

A地点（第16図）

道路跡2条、掘立柱建物跡8棟以上、井戸跡1基以上、ほかに多数の溝跡、土壌などを検出した。

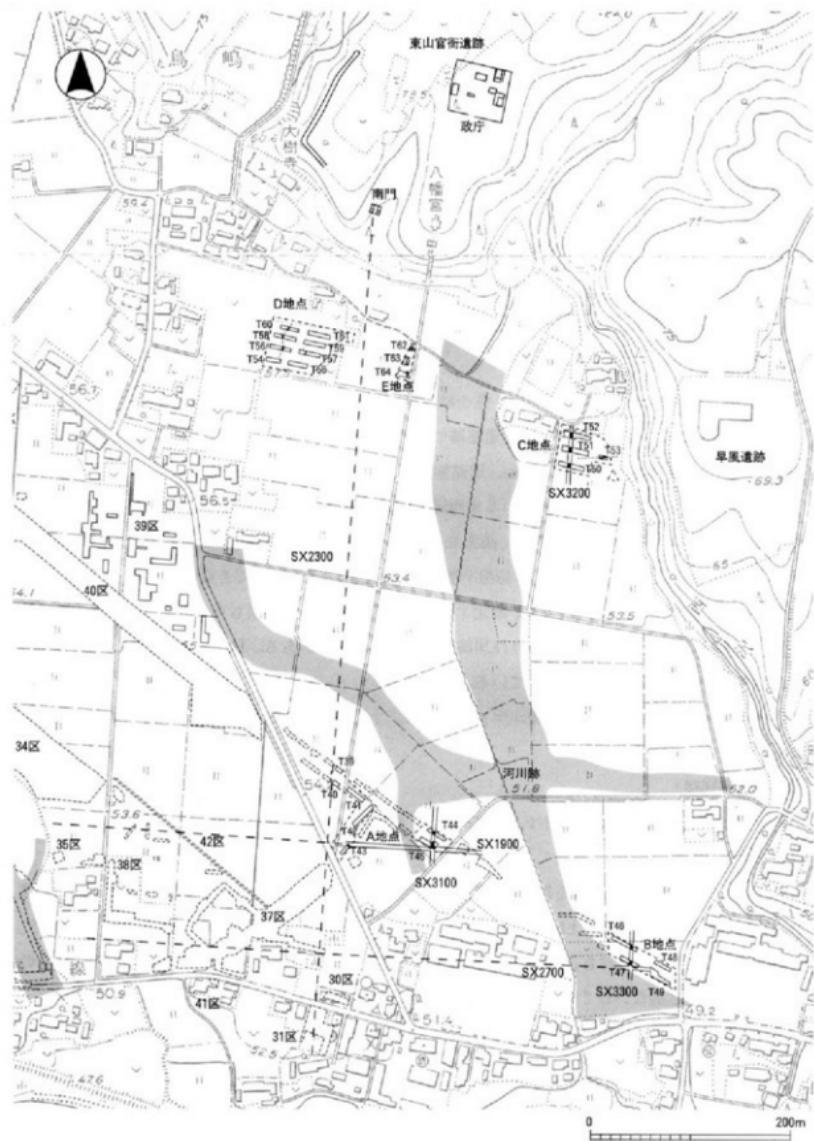
道路跡は、SX3100南北道路とSX1900東西道路、およびそれら南北・東西道路の交差点を確認した。

SX3100道路跡はT44・45で新たに確認した南北道路跡で、長さは16m以上である。側溝は2時期の変遷が認められ、新しい側溝の上幅は40～50cm、道路幅は側溝上端中心間で約4mである。

SX1900道路跡は23・29S区（齊藤 2002）・38区など（齊藤 2004）で検出されている東西道路跡で、東側延長をT43・45で確認した。T43では南側溝、T45では北側溝を検出し、2時期の変遷が認められる。新しい側溝の上幅は約60cmである。

T45ではSX3100南北道路跡とSX1900東西道路跡の交差点部分を検出しており、SX3100東側溝とSX1900北側溝が「L」形に接続している。

掘立柱建物跡は、SX2300南北大路に近い地点で比較的多く検出し、T39～43では8棟以上検出した。柱穴の平面形は隅丸方形のものがほとんどで、規模は一辺50～70cmのものが多いが、130cmと大型の



第16図 A～D地点の位置と主な遺構配置図

ものもある。建物の平面規模は調査区が狭いためはっきり分かるものはないが、T41で検出したものには、東西2間以上、総長5m以上、南北3間以上総長6m以上のものがある。

その他の遺構としては、T42で井戸跡を検出した。

遺物は、遺構確認の際、土師器甕・須恵器環・甕、石器剥片が少量出土した。土師器甕には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。須恵器環には底部切り離し技法が静止糸切りで体部下端から底部周縁にかけて回転ケズリ調整が施されるものがある。

B 地点（第16図）

道路跡2条、掘立柱建物跡2棟、溝跡5条のほか、烟跡や若干のピットを検出した。また、確認面や表土から土師器、須恵器などが少量出土している。なお、T47~49では削平が地山面まで及んでおり、遺構の残存状況は悪い。

道路跡は、南北道路1条、東西道路1条を確認した。

SX3300道路跡は新たに検出した南北道路跡で、T46・47で長さ20mを確認した。道路側溝は1時期のみを確認し、側溝の上幅は40~50cm、道路幅は側溝上端中心間で約4mである。

SX2700道路跡は37区で検出されている東西道路跡（齊藤2004）で、東側延長の北側溝をT47で検出した。道路側溝は1時期のみを確認し、側溝の上幅は35cmである。またT49ではSX2700のさらに東へ延びる部分の存在が想定されるが、T49西半部は削平が著しいため確認できなかった。

掘立柱建物跡は、いずれも東西1間、南北1間以上と小規模で柱穴規模も小さい。方向は南北基準線に近い。溝跡には弧状に巡るものがあり住居跡の外周溝の可能性がある。他に、T49東端で深さ80cmほどの落ち込みの西辺部分が検出されている。

遺物は、土師器甕、須恵器環・甕が少量出土した。土師器甕は非ロクロ調整である。

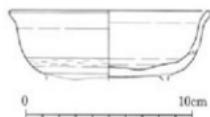
C 地点（第16図）

全体的に湧水がみられる。遺構は、道路跡1条、掘立柱建物跡4棟以上のほか、溝跡、土壤、ピットなどを検出した。

道路跡はSX3200南北道路跡を新たに検出した。T50~52で長さ34mを確認し、道路側溝は、西側溝で2時期の変遷が認められ、上幅は30~120cm程である。道路幅は側溝上端中心間で3~5mである。

掘立柱建物跡は、いずれも、方向は南北基準線に近く、柱穴は一辺20~30cmの方形の小規模なものであり、規模が2間ないし3間で、柱間寸法は2~4mである。

溝跡は数状検出しているが、T53で検出した東西方向の溝跡は幅約80cmで遺構確認時に比較的多く



基種	遺構/期	既存	法量(cm)		
			口径	底径	器高
須恵器 高台环	445KT33 溝跡確認		(12.0)	—	—
特徴					写真回数 登録
内外：ロクロナデ 环部底：回転ケズリ 高台取り付け→ロクロナデ					11-15 68

第17図 C地点出土土器

の遺物が出土した。その他の遺構には、T51から径3m以上の土壙が2基検出されている。

遺物は、T53の溝跡から土師器甕、須恵器高台坏・甕が出土した。土師器甕には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。須恵器高台坏（第17図）は坏部の底部切り離し技法がヘラ切りで回転ケズリが施された後、高台が取り付けられている。

D地点（第16図）

地山面は東に向かって低くなり、古代の旧表土であるⅢ層は東に向かって急に厚く堆積している。全体的に湧水がみられ、低い東側では非常に激しい。遺構は乏しく、溝跡数条と土壙、ピットがわずかに検出されるのみである。遺物は出土していない。

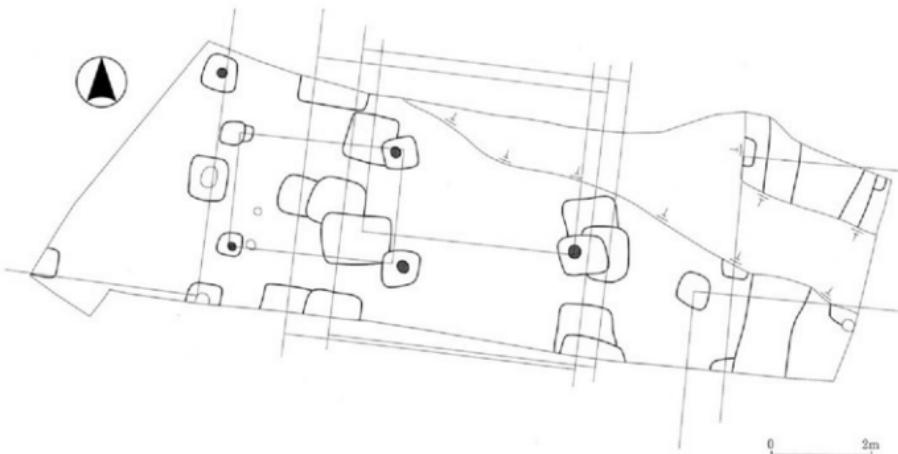
T57では北東から南西方向に延びる溝跡が検出された。幅30cm、深さ約17cmで人為的に埋め戻されおり、底面から木片を検出したが性格は不明である。T56～60にかけて検出した南北溝跡は、幅180～280cmで、蛇行しており、旧流路の可能性がある。T60で土壙1基を検出した。平面形は楕円形を呈し長径2m以上、短径1.4mである。

E地点（第16・18図）

地形は平坦で若干の湧水がみられる。遺構密度は高く、掘立柱建物跡5棟以上、溝跡8条、土壙1基、ピット多数を検出した。

掘立柱建物跡は、いずれもT64で検出した。調査区が狭いため平面規模は分からぬが、柱穴はいずれも平面形が方形ないし隅丸方形で、一辺80cm以上のものが多く、なかには一辺140cmのものもある。建物は互いに重複しており、また立て替えがおこなわれているものも1棟認められた。他に、溝跡は東西溝、南北溝がある。

遺物はT64の遺構確認の際、須恵器坏・高台坏・蓋・甕破片などが出土した。



第18図 E地点T64遺構配置図

第Ⅲ章 分布調査

1. 調査の目的と方法

本遺跡は、東山官衙遺跡の外郭南門跡から南へ続く南北道路跡を基準とした方格地割の発見により、東山官衙遺跡と一体の遺跡であると捉えられる。また、これまでの調査で発見した区画施設に関しても、これが東山官衙遺跡を囲む区画施設となる可能性もあり、この区画施設全体のあり方の追求も必要なことと考えられた。さらに東山官衙遺跡には、本遺跡の他にも早風遺跡や上の山遺跡、毘沙門堂遺跡といった同時期の遺跡が隣接しており、これらの遺跡の性格についても考えていく必要があるため、これらの遺跡と、土塁・空堀の存在が指摘されていた（宮崎町史編纂委員会1973）周辺丘陵を対象に分布調査を実施することにした。分布調査は、12月1日～5日と3月24日に実施した。なお、確認した遺構や遺物採集地点は1/5000地形図へ記入し、状況をデジタルカメラにより撮影した。

2. 遺構分布

- a～f 地点で台地状ないし土壘状の高まりを、g 地点で古代の整地地業跡を確認した。（第2図）
- a 地点：東山官衙遺跡西側の地点で、周囲より一段高くなっている畝を確認した。北西から南東に延びる高さ1m程の台地状の高まりである。
- b 地点：東山官衙遺跡に隣接する東側の丘陵西斜面から丘陵尾根にかけて、東西方向の土壘状の高まりを確認した。丘陵尾根から西に向かって小尾根上を下り、西側の沢手前で不明瞭となる。約100m前後確認し、高さは残存状況が良好な東部で50～80cmである。
- c 地点：b 地点の南、東山官衙遺跡の東側の丘陵西斜面から丘陵尾根にかけて、東西方向の土壘状の高まりを確認した。丘陵尾根から谷筋の落ち際に沿って西へ続くが、中間の斜面では不明瞭である。西側で約40～50m、東側で約40～50m確認している。高さは東側で50～60cmである。
- d 地点：上の山遺跡の北側の丘陵頂部で、南北方向の高まりを約30～40m確認した。高さは60～70cmである。
- e 地点：上の山遺跡の南東部、上の山遺跡が立地する丘陵の東縁に沿って続く南北方向の土壘状の高まりを30～40m確認した。高さは40～50cmである。
- f 地点：上の山遺跡の南側で、北辺と西辺が「L」字状に巡る土壘状の高まりを確認した。南北約50m、東西約50m、高さは70～80cmである。
- g 地点：早風遺跡が立地する尾根の先端付近の地点である。東西に切られた露頭で、整地地業と溝跡を確認した。整地地業は路頭の北面で確認し、東西5～6mの幅で版築状の土層が認められ、段状に掘込まれた後に整地されている。一定の幅をもった南北方向の区画施設ないし平坦面造成の可能性が考えられる。溝は路頭の北面と南面で確認し、整地地業より新しく、幅2～3mである。

3. 遺物分布

壇の越遺跡の南東部から毘沙門堂遺跡にかけての範囲で古代の須恵器・土師器を採集し、この2遺跡間では遺物の分布が連続していることが確認された。これらの遺跡は隣接し、地形的にも途切れないことから一連の遺跡と捉えられる。また上の山遺跡南側の段丘面東側で古代の須恵器・土師器が採集されたことから、上の山遺跡の範囲が南側に広がると考えられる。

柱列跡属性表

遺構名	位置	長さ(m)	幅 方		柱のあたり範囲 (cm)	方 向	重複関係	遺 物		
			幅(cm)	深さ(cm)						
SA2655	B区	4.6以上	4.0~7.0	5.0~6.0	腰台形	明黄褐色粘土、灰褐色砂	10~20	E-3°~S	—	日板各取り穴：漆器器坏、高台坏、高台坏、腰片、土师器片
SA2662	E区	7.1以上	—	—	腰壁土：砂物を少し含む黑色土	10~30	N-3°~E	—	—	—

柱列跡属性表

遺構名	位置	標 遺	柱 列		柱 穴				柱痕跡	方 向	遺 物	重複関係
			縦 長	柱間寸法	平面形	平面寸法	深さ	理 土				
SA2655	B区	東西3間以上	5.2以上	西から1.6・1.6・1.2	円形基調	20~25	25	地山ブロックを含む黑色粘土質土	10	E-10°~S	—	—
SA2661	B区	東西3間以上	6.8以上	西から2.7・2.1・1.8	円形または隅丸方形	20~40	—	—	10~15	ほぼ東西	—	—
SA2663	G区	東西3間以上	3.5以上	西から1.05・1.05・1.25	不整円形	30~35	—	—	10~15	E-11°~N	—	—

建物跡属性表

遺構名	位置	建物の構造	建物規模(m)			柱穴規格(cm)			柱筋跡	建物の方向と 測定箇所	遺物(出土物)	重複関係	埋土	
			柱行縦長・柱間寸法	柱行横長・柱間寸法	柱行縦長・柱間寸法	平面形	平面寸法	深さ						
SB2611	B区	東西以北上×南北2	0.20	2.0	北 3.8 1.9m等間	東	隅丸方形	40~40	46	直径15~25	N-6°~E	東	—	南東隅で地山砂ブロックを多く含む黒色粘土質土と地山粘土ブロックを非常に多く含む褐色砂
SB2618	B区	東西以北上×南北2	0.20	東から1.2・1.3	北 (2.5) 2.5	東	隅丸反対形	40~50	52	直径10~20	E-6°~S	北	—	地山粘土ブロックを多く含む黒色土
SB2665	B区	東西以北上×南北2以北	—	—	(3.0) 3.3	西	隅丸反対形	40~50	—	N-2°~W	西	—	—	
SB2635	G区	東西×南北2	4.6	西から1.4・1.7・1.3	南 3.1 北から1.6・2.1	東	隅丸方形	20~10	35~65	直径20	E-3°~N	南	SD2638より古い	地山ブロックより古い
SB2636	G区	東西×南北2or3	5.5	西から1.9・1.9・2.0	北 3.8 1.9m等間	西	隅丸方形	40~50	40	直径10~15	E-3°~N	北	SD2609+2670より古い	地山粘土ブロックや砂を含む黒色粘土質土、黒色粘土など
SB2637	G区	東西以北上×南北2以上	0.20	2.0	北 (1.8) 1.8	東	隅丸方形	40~50	30	直径20	N-3°~W	北	—	地山ブロックを含む黒色粘土質土
SB2638	G区	東西3or3×南北2	3.4	西から2.6・2.8	北 5.1 北から2.4・2.7	西	隅丸反対形	60~90	40~60	直径15~20	N-5°~W	西	SD2635+3K2641-2644より新しい	地山粘土ブロックや砂を含む黒色粘土質土、黒色粘土、および地山粘土主体の黒褐色粘土などで、一部グライ化
SB2640	G区	東西3×南北2	6.6	2.2m等間	南 4.8 2.4m等間	西	隅丸方形	60~90	40~55	直径15~25	E-4°~N	南	SD2639より古い	地山ブロックを含む黒色土、黒褐色粘土質土、黒色粘土、および地山粘土主体の黒褐色粘土などで、一部グライ化
SB2647	G区	東西2×南北1	3.5	西から1.8・1.7	南 3.3 3.3	西	隅丸方形	25~45	25	直径10~20	N-3°~W	東	—	地山粘土・砂ブロックを多く含む黒色粘土質土
SB2648	G区	東西以北上×南北2	(0.1)	西から1.4・2.7(2間分)	北 3.1 北から1.3・1.8	西	隅丸方形	30~40	25	直径10~15	E-3°~N	北	—	地山土・砂ブロックを含む黒色粘土質土
SB2652	KK区	東西以北上×南北2	(1.8)	西から1.7・1.5	北 3.9 2.1・1.8	西	隅丸方形	25~30	29	直径10~20	N-7°~E	西	—	地山砂ブロックを含む黒色粘土質土

第1表 遺構属性表(1)

溝跡・区画跡属性表

道構名	位置	長さ(m)	上幅(cm)	深さ(cm)	断面形	方向	集塵渦凹	堆 物	堆積土などの特徴
SD2664	A区	2.8以上	約30	7	逆台形	N~E~E	SDX2669より古い	—	—
SD2653	B~DK	25以上	60~80	—	—	N~E~W ~N~E~E	—	堆塵渦凹片	—
SD2652	B区	11以上	60~160	—	—	弧状	SK2651より古い	土脚器片	暗褐色粘土ブロックを含む黒色土
SD2656	B区	3.5	70~80	—	—	E~15°~S	—	堆尘器片、ロクロ土脚器片	—
SD2659	B区	15以上	100~220	—	—	弧状	—	堆尘器片、土脚器片	—
SD2653	B区	2.2以上	80	25	皿狀	N~7°~E	—	—	砂を少し含む黒色土ないし粘土質で、1箇には火成灰が混入される
SD2654	B区	3.0以上	25	30	四角	N~8°~E	—	—	砂や堆山ブロックを含む黒色粘土質
SD2666	C区	2.2以上	45~60	—	—	N~5.5°~W	—	—	—
SD2621	E~F~H区	4.3以上	70	20~30	逆台形	E~4°~S	—	—	A期か地主堤の間に古い黃褐色・灰褐色土ブロックを含む黒色粘土質で、堆山砂を含む黒色粘土質
SD2623	F~H区	5.1以上	70~80	25~30	逆台形	N~1.5°~W	—	堆塵器片、皿片	初期段合含む黒色土と黒褐色粘土質で、D2砂を含む黒色土と堆山砂を含む粘土質
SD2622	F~L区	2.5以上	30~60	20~25	皿狀	N~4°~E	—	堆塵器片	A期か地主堤に含む黒色粘土質と地主堤全体のに古い黃褐色。B期か堆山砂を少し含む黒色粘土質
SD2624	F区	6.4	約40	—	—	ほぼ東西	—	—	—
SD2625	F区	2.7以上	30~40	—	—	N~5°~W	—	—	—
SD2624	G区	約5.5	35	—	—	N~1°~W	—	堆塵器片	—
SD2639	G区	2.8	30	—	—	N~3°~W	SK2639・SH2640より新しい	土脚器片	—
SD2646	G区	7.3以上	50~100	24	皿狀	N~2°~E	SD2649より新しい	堆塵器片・面傾・高台・堆・盤・ロクロ土脚器片、土脚器片	地山ブロックを含む黒色粘土質、暗褐色砂質土
SD2649	G区	7.35以上	50~150	30	段わづく皿狀	N~2°~W	SD2668・SD2646・SD2649	—	地山小ぶりのロクロを含む黒色粘土質、暗褐色砂質土
SD2650	G区	7.2以上	50~100	20	皿狀	北西に凸の低状	—	—	地山ブロックを含む黒色粘土質、暗褐色砂質土
SD2668	G区	2.5以上	15~40	—	—	N~30°~E	SD2649より古い	—	—
SD2669	G区	5.82以上	30~50	—	—	N~9°~E	SD2670と同時期	—	—
SD2670	G区	12.2以上	30~60	14	皿狀	E~9°~E	SD2669と同時期	—	地山ブロックを少し含む黒色土
SD2657	H区	6.8以上	60~120	—	—	東東に凸の低状	—	ロクロ土脚器片	—
SD2667	H区	7.8以上	30~60	—	—	東に凸の低状	—	—	—

土壤属性表

道構名	位置	平面形	平面面積(cm)	断面形	深さ(cm)	重複開闢	堆 物	堆積土
SK2614	B区	橢円形	116以上×70	縱面凸の逆台形	35	—	堆塵器盤・坪・ロクロ土脚器片、土脚器片	黒色土ブロックを含む黒色粘土質、黑色土・地山砂ブロックを多く含む黒色土
SK2651	B区	橢円形	400×220	片側に段がつゝ盤形	56	SD2612より新しい	堆塵器盤	地山ブロックを含む黒色粘土質、地山砂ブロックを少し含む黒色粘土質
SK2652	B区	楕丸長方形	300×80	皿狀	18	—	堆塵器盤片	黒色土ブロックを含む黒色粘土質、明暗色粘土ブロックを含む黒色粘土質(人為)
SK2671	B区	不整脩円形	360以上×140以上	—	—	—	—	—
SK2627	F区	不整脩円形	360以上×160以上	—	—	—	堆塵器盤・坪片、土脚器片	—
SK2638	F区	橢円形	410×220	—	—	—	堆塵器盤片、土脚器片	—
SK2633	G区	いびつな長方形	400×370	—	—	SD2639より古い	堆塵器盤・坪片、ロクロ土脚器片、土脚器盤片	—
SK2641	G区	長方形	500×260	逆台形	—	SD2638より古い	堆塵器盤・坪片、土脚器片	地山砂小ぶりのロクロを含む黒色粘土質、地山砂ブロックを多く含む黒色土(人為)
SK2642	G区	いびつな長方形	200×170	片側に段がつゝ逆台形	50	—	堆塵器盤・兼	地山砂ブロックを含む黒色粘土質、地山砂土・土脚器盤片(人為)
SK2643	G区	橢円形	100×70	逆台形	30	—	堆塵器盤・兼・土脚器片	地山砂小ぶりのロクロを含む黒色粘土質、地山砂土・土脚器盤片(人為)
SK2644	G区	いびつな長方形	290×230	逆台形	—	SD2638より古い	—	地山砂ブロックを含む黒色粘土質、黑色砂、地山砂ブロックを含む黒色粘土質(人為)
SK2645	G区	いびつな長方形	310×260	不定形	68	SD2630より古い	堆塵器盤・兼・機刀	地山砂ブロックを含む黒色粘土質、黑色砂、地山砂ブロックを含む黒色粘土質(人為)リーフ状色斑など(自然)
SK2656	H区	不定形	70×65	—	—	—	土脚器盤・ロクロ土脚器片	—
SK2629	K区	橢円形	150×90	—	—	—	堆塵器盤・土脚器片	—
SK2630	K区	不整脩円形	190×80	—	—	—	堆塵器盤・土脚器盤	—

第2表 道構属性表(2)

第IV章　まとめ

1. 道路跡と方格地割

本遺跡では、これまでの遺跡西半部を対象とした調査によって、東西・南北道路跡が検出され、これらによる方格地割の存在が確認されている。そして方格地割は、東山官衙遺跡外郭南門から南に延びるSX2300南北道路跡を基準としていると考えられ、この南北道路を南北大路と捉えている（齊藤2003）。

今回の調査では、SX3100・3200・3300南北道路跡・SX3000東西道路跡を新たに発見し、これまで確認されていたSX2600南北道路跡・SX2900・1900・2700東西道路跡の延長を検出した。また、SX2600・3000、SX3100・1900道路跡交差点を検出した（第19図）。

以下では、今回検出した道路跡の構造・規模、方格地割のあり方、年代などについて他の調査区での成果を踏まえながらみしていく（第3表）。

道路跡の概要

SX2600南北道路跡は39A・E区で検出した。南の延長が38区（齊藤2003）・40区（加美町教育委員会2004）で確認されており、長さは370m以上にわたる。道路幅は側溝中心間で3.8～4.8mで、SX3000東西道路跡の交差点南部分では、A期よりB期の方がやや狭くなっている。39区では2時期の変遷が認められる。SX2300南北大路から西に約220mに位置する。方向は、39A区と38区の道路中心でN-5.7°-Eである。

SX3100南北道路跡は遺跡東部のA地点で検出した。T45でSX1900東西道路跡と交差する。道路幅は側溝中心間で約4mである。SX2300南北大路から約108m東に位置する。

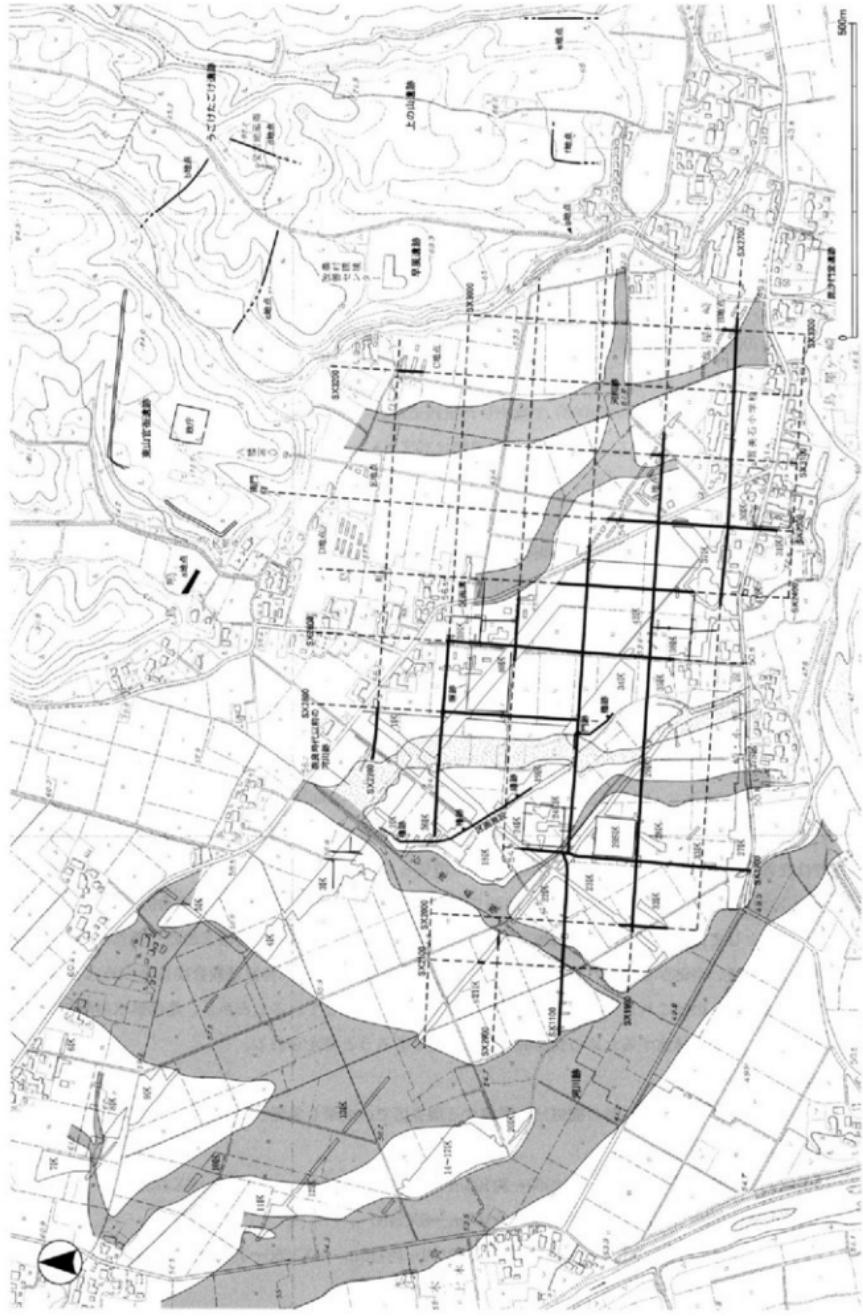
SX3200南北道路跡は遺跡東部のC地点で検出した。道路幅は側溝中心間で3～5mである。SX2300南北大路から約215m東に位置する。

SX3300南北道路跡は遺跡東部のB地点で検出した。道路幅は側溝中心間で約4mである。SX2300南北大路から約312m東に位置する。

SX3000東西道路跡は、39A・B区で検出した。西の延長を40区で検出しており、長さは200m以上にわたる。A区では路面はほぼ残存していた可能性があり、その場合、当時の表土上面がそのまま路面となっていた。道路幅は39区で3.3～4.6m、40区で3～5mである。SX2600南北道路跡との交差点より東側部分では、道路幅はA期よりB期の方がやや狭くなっている。東山官衙遺跡外郭南門から約

南北道路	東西道路	道路名	位置(m)	幅員(m)	延長(m)	道路幅(m) (側溝中心間)	方向(°)	年代
		南門跡から	SX2300から	(m)	(m)	(側溝中心間)		
		SX2600	西に220	320	3.8～4.8	N-5.7°-E		8世紀中葉
		SX1900	東に108	16	4	?		8世紀中葉？～
		SX3100	東に215	34	3～5	?		8世紀中葉？～
		SX3200	東に312	20	4	?		8世紀中葉？～
		SX3000	南に310	200	3～5	E-38°-S		8世紀中葉～10世紀前葉？
		SX2900	南に420	550	4～5.5	E-40°-S		8世紀中葉～
		SX1900	南に635	790	3.6～8.2	E-3°-S		8世紀中葉～
		SX2700	南に745	450	5.4	E-2°-S		8世紀中葉～

第3表　道路跡の位置と規模および年代



第19図 道路跡と主な遺構

310m南に位置する。方向は39A区と40区東端の道路中心でE-3.8°-Sである。

SX2900東西道路跡は、39K区で南側溝を検出した。西の延長を40区で検出している。また、21区ではこの道路跡の延長上にあたる部分で東西方向の溝とそれに沿う柱列跡を検出しており（宮崎町教育委員会2003）、この溝跡が道路跡の南側溝と考えられ、その場合、長さは550m以上にわたる。道路幅は40区で4~5.5mである。東山官衙遺跡外郭南門から約420m南に位置する。方向は39K区と21区の南側溝でE-4.0°-Sである。

SX1900道路跡は23区（宮崎町教育委員会2003）・29S区（齊藤2003）・38区などで検出している東西道路跡で、その延長をT43・45で確認した。長さは790m以上にわたる。道路幅は38区で3.6m、29S区のSX1700南北道路跡との交差点付近で最も広く8.2mである。東山官衙遺跡外郭南門から約635m南に位置する。

SX2700道路跡は37区（齊藤2003）で検出した東西道路跡で、その延長にあたる部分の北側溝をT47で検出した。長さは450m以上にわたる。道路幅は37区で5.4mである。東山官衙遺跡外郭南門から約745m南に位置する。

道路跡の構造・規模

今回検出した道路跡は、いずれも両側に素掘りの道路側溝を伴う。これまでの調査で確認されている他の道路跡についても、多くの地点で素掘りの側溝が認められているが、SX2400南北道路跡では、西側にのみ側溝がみられ、東側には側溝がみられず、柱列がともなう箇所が確認されている（加美町教育委員会2004）。これらのことから、道路跡は基本的に両側に側溝を伴うが、部分的に側溝が柱列にとって代わられる場合もあったと考えられる。

道路幅は、狭い部分で約3m、最も広い部分で8.2mと変異がある。また同一の道路跡であっても場所ごとに異なる場合が認められるなど、道路幅は一定してはいない場合が多い。

交差点は、SX2600・3000道路跡交差点をA区で、SX3100・1900道路跡交差点をA地点で検出した。いずれにおいても互いの道路側溝は「L」形に接続している。ところで、SX2600・3000道路跡交差点では交差点の東西両側にはSX3000東西道路跡を横切る小規模な溝跡が認められた。これに類する例は、SX2800南北道路跡とSX3000東西道路跡交差点でも認められる（加美町教育委員会2004）。また類似した例としては、山王遺跡多賀前地区の北1西3道路跡交差点や東西大路西2道路交差点付近で、路面を貫く浅い溝跡が検出されており、路面排水溝跡とみられている（宮城県教育委員会1995）。しかし、本遺跡のものはこれよりも深く、位置もより交差点に近接していることから、路面排水の溝ではなく、別の側溝へ排水するための側溝間を繋ぐ溝跡であろうと考えられる。

方格地割

本調査で確認された道路跡の間隔は、関連する調査区での成果も参照しながら各道路中心を基準に計測すると次のようになる。

東西道路：SX3000←約108m→SX2900←約108m→SX1100、SX1900←約106m→SX2700

南北道路：SX2800←約107m→SX2600←約107m→SX2400

SX2300（南北大路）←約107m→SX3100←約110m→SX3200←約96m→SX3300

道路の間隔は、SX3200～SX3300間で96mとやや狭くなっているのを除いて、約106～110mの範囲におさまる。また、道路の方向は、南北道路が北で東に約6°、東西道路が東で南に約4°振れている状況が認められた。西部を中心としたこれまでの調査では、道路中心間の距離が105～110mほどと推定されており（齊藤2003）、今回の調査結果もほぼこれに従っている。このことから、遺跡の東部でも西部と同様に整然とした地割りが行われており、この方格地割は東側の丘陵際まで及んでいることがほぼ捉えられた。また、今回とこれまでの調査で確認した道路跡は、南北道路10条、東西道路6条となり、道路による地割りは東西1130m、南北650mという広大な範囲に及ぶことが明らかになった。

変遷と年代

これまでの調査成果によると、道路跡の年代は、道路跡に基づいて構築されているとみられる遺構等や周辺からの出土遺物の年代から、上限が8世紀前半代に遡る可能性も考えられている。下限は、SX1100東西道路跡については10世紀前半頃まで存続していた箇所がみとめられるが、他の道路跡についてははっきりしていない（齊藤2003）。

今回検出した道路跡についてみると、SX2600南北道路跡とSX3000東西道路跡のB期側溝からは、土師器坏・鉢・甕・須恵器坏・高台坏・蓋・鉢・甕が出土している。土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。須恵器坏は器高がやや高く、体部下端から底部全面に回転ケズリが施されるもの、体部下端から底部に手持ちケズリが施されさらに底部にナデが施されるもの、底部全面に手持ちケズリが施されるもの、底部切り離し技法が静止糸切で体部下端から底部周縁に手持ちケズリが施されるもの、底部全面にナデが施されるもの、底部切り離し技法がヘラ切りで無調整のもの、ヘラ切り後に底部周縁や全面に軽いナデが施されるもの、底部切り離し技法が回転糸切りで無調整のものがある。

こうした特徴をもつ須恵器坏は、8世紀第2四半期に位置づけられる色麻町日の出山窯跡群第Ⅲ群土器（色麻町教育委員会1993）、8世紀末から9世紀初頭に位置づけられる築館町伊治城跡SI173住居跡出土土器（築館町教育委員会1991）、8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられる大衡村彦エ門橋窯跡SK1土壤出土土器にみられる（宮城県教育委員会1996）。

したがって、SX2600南北道路跡とSX3000東西道路跡は、8世紀第2四半期頃から少なくとも9世紀初頭に機能していたと考えられる。また、SX3000東西道路跡は、40区で灰白色火山灰に覆われる水田跡によって壊されている部分が確認されていることから（加美町教育委員会2004）、10世紀前葉以前には廃絶していたことが判明している。

SX2900東西道路跡は、40区において、SX2600南北道路跡との交差点で側溝が互いに接続していることが確認されていることから、これと変遷を同じくしているとみられる。

SX1900・2700東西道路跡・SX3100～3300南北道路跡からは遺物は出土していないが、周辺から出土した遺物の中で特徴が捉えられる須恵器坏をみると、底部切り離し技法が静止糸切で、体部下端から底部周縁に回転ケズリが施されている。また須恵器高台坏は、环体部下端から底面全面に回転削りが施された後、高台が取り付けられている。こうした特徴をもつ須恵器は、8世紀第2四半期に位置づけられる色麻町日の出山窯跡群第Ⅲ群土器（色麻町教育委員会1993）にみられるところから、これら

の道路跡についても8世紀後半には機能していた可能性が考えられる。

以上をまとめると、道路跡の年代については、これまでの見解と同様に上限は8世紀後半に遡る可能性も考えられる。終末については年代を特定できないが、10世紀前葉頃には、機能している道路と廃絶している道路があることが判明した。

2. 地割内部の様相

39区は、SX2600南北道路跡の西側と東側の地割にまたがっている。ここでは、西側をI区、東側をII区とし、それぞれの地割内部の様相について述べる（第20図）。

I区

地割の北東部にあたる39A～E区を調査し、材木縫跡2条、柱列跡2条、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、溝跡、土壙を検出した。遺構の重複はほとんどみられない。

SX3000東西道路跡に沿ってSA2655柱列跡があり、地割北辺には道路と地割内部を画する縫跡が設けられていたと考えられる。SX3000東西道路中心から35mほど南には東西方向のSA2615材木縫跡があり、西側がSX2800南北道路跡の手前まで延びていることが40区で確認されている⁽³¹⁾。また、39区ではSX2600南北道路跡に沿ってSA2622材木縫跡が、40区ではSX2900東西道路跡に沿う柱列跡と、SX2800南北道路跡に沿って南からSA2615材木縫跡の手前まで延びる柱列跡が検出されている。これらは一連の縫となって、地割の南部を東西約98m、南北約68mの長方形に囲んでいたと考えられる。この内部では、規模の大きい建物跡や、倉庫と考えられる建物跡をはじめ多数の建物跡、および井戸跡などが検出されている（加美町教育委員会2004）。

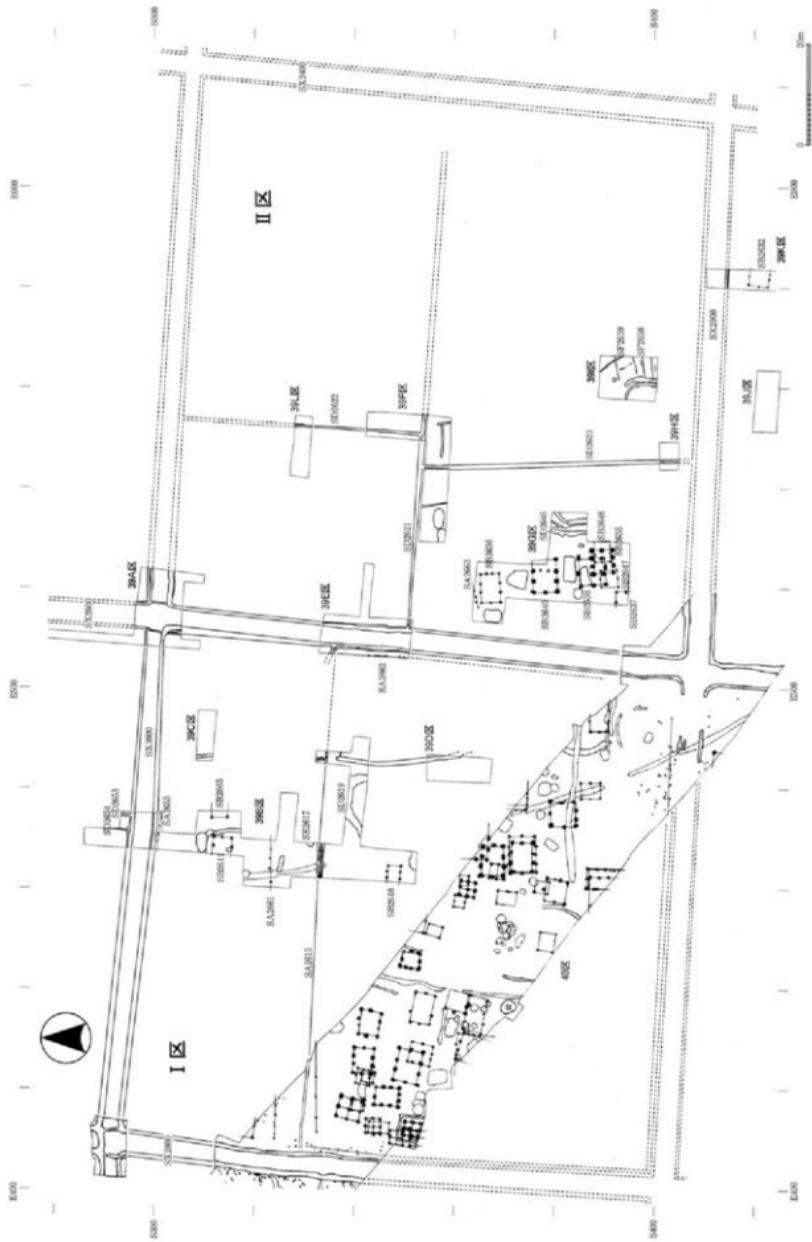
地割北部では、柱列跡、建物跡、井戸跡などが発見されている。建物跡は地割南部のものと概ね方向を揃えており、南部のものとともに計画的に配置された同時期の遺構である可能性がある。

建物跡・材木縫跡の年代については、SA2615材木縫跡のB期抜き取り穴から、須恵器環・高台環が出土している。須恵器環は器高が高く、底部切り離し技法がヘラ切りで、切り離し後にナデ調整を施すものと無調整のものがある。高台環は、体部に稜をもち、台部は高めで「ハ」字状にひらく。こうした特徴をもつ須恵器は、8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられる大村彦エ門橋窯跡SK1土壙出土土器にみられる。また、SE2617井戸跡は、堆積土からSA2615材木縫跡B期抜き取り穴出土の須恵器高台環と同一個体の破片が出土している。以上のことから建物跡・材木縫跡の年代は8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。なお、建物跡からは遺物は出土していないが、材木縫が存続していた年代のものと考えられる。

II区

地割内では、39A・E～I・L区を調査し、区画溝跡3条、掘立柱建物跡7棟のほか、溝跡、土壙、畑跡を検出した。

SX3000東西道路中心から48m南にSD2621、SX2600道路中心から東に約41mにSD2622、約34～39mにSD2623区画溝跡があり、地割内部を東西南北に4分割しているとみられる。SD2621はSX2600南北道路跡東側溝に接続しており、区画溝と道路側溝は一連であると考えられる。



第20回 地圖内部の様相

南西部の区画には建物跡が集中している。SB2636やSB2640は比較的規模の大きな東西棟で、中心的な建物跡とみられる。建物跡は重複しており、SB2638の周辺では少なくとも3時期の変遷が認められる。SB2635の柱穴はSB2638の柱穴によって壊されていることから、SB2638以前に位置付けられる。建物跡の配置をみると、SB2635の南側柱列とSB2637の北側柱列、SB2636の西妻とSB2637の東側柱列は柱筋がほぼ揃っている。また、柱穴規模・柱間寸法においてもSB2636と2637とが類似しており、SB2635とSB2636、SB2637は同時期の建物跡と考えられる。したがって、これらの建物は、SB2635・2636・2637—SB2638・2640・2647・2648と変遷したとみられる。なお、SB2638にみられる切り取り穴を、SB2647・2648構築時のものと考えれば、SB2638→SB2647・2648という変遷の可能性も考えられる。

SB2638建物跡掘方埋土からは須恵器坏が出土し、底部切り離し技法はヘラ切りで無調整である。また抜き取り穴堆積土からも須恵器坏が出土し、底部全面にナデが施されている。SB2636より古いSK2641は埋め戻されており、埋土から須恵器坏が出土し、底部切り離し技法がヘラ切りでナデが施されている。以上のような土器の特徴から、建物跡の年代はいずれも8世紀後葉から9世紀初頭と考えられる。

したがって、地割の南西区画では、道路建設以降、8世紀後葉から9世紀初頭までの間に、SB2636建物跡やSB2640建物跡を中心とした計画的な配置の建物群が成立していたと考えられる。

今回の調査では、I区で地割を南北に分割する形で南部に長方形の堀を巡らし、建物跡や井戸跡を配置する状況が、II区では地割を区画溝で4分割し、建物跡等を配置する状況が認められた。II区のように地割を4分割する例は、38区でも認められる(齊藤2003)。他に、これまでの調査で、地割の南西部に一辺62~68mの方形に巡る材木塀を巡らし、内部に建物跡を規則的に配置している例や、一つの地割に貫して竪穴住居が営まれる例などが確認されており、地割内部の様相が多様であることが明かとなった。

3. 区画施設

これまでに26・25・19・34区で、上位段丘縁沿いに北西～南東方向の築地塀跡と材木塀跡が450mにわたって検出されている。門跡がSX1100東西道路上に設置され、この両側に材木塀が取り付き構跡が付設されている。年代は8世紀後葉から10世紀前葉の間と考えられている(齊藤2003)。

一方、今回の分布調査では、東山官衙遺跡の北側の丘陵や、塙の越遺跡の東に隣接し早風遺跡が立地する丘陵などで土壘状の高まりや整地地業と溝跡などを確認した。土壘状の高まりは、東山官衙遺跡のすぐ東側の丘陵で北西から南東方向のもの2条、それらの東に隣接して北東から南西方向のもの1条を確認した。これらは丘陵の尾根に沿って設けられ、高さは50~80cmで、それぞれ長さが40~100mにわたっている。また、早風遺跡の東に隣接する丘陵上に立地する上の山遺跡の南東の沢沿いで、南北方向のものを1条、南側の丘陵斜面でL字状に巡るもの1条確認した。これらは高さ40~80cmで、長さは30~50mにわたる。

整地地業と溝跡はd地点の土壘状の高まりのほぼ延長上、丘陵尾根端部の路頭で確認され、南北方向の区画施設ないし平坦面の造成の可能性が考えられる。

このような区画施設が東山官衙遺跡に隣接して存在することは、これらが東山官衙遺跡に関連するものであり、本遺跡で発見されている区画施設と一体となって、東山官衙遺跡の外郭のさらに外側に長大な区画施設が巡っていた可能性を想起させる。このような知見はこれまでの見方を変えるものであり、8世紀代を中心とした時期のこの地域における律令政府のありかたを明らかにしていく上で新たな視点をもたらすことになる。

4.まとめ

1. 今回の調査では、SX3100・3200・3300南北道路跡・SX3000東西道路跡を新たに発見し、これまで確認されていたSX2600南北道路跡、SX2900・1900・2700東西道路跡の延長を検出した。また、SX2600・3000、SX3100・1900道路跡交差点を検出した。
2. 道路の間隔は、西端部のSX2100-SX2200間と東端部のSX3200-SX3300間を除いて、約106~110mの範囲におさまり、遺跡の東部でも西部と同様の規格に従った整然とした方格地割が東側の丘陵際まで及んでいることを捉えた。また、これまで確認した道路跡は、南北道路10条、東西道路6条となり、地割は東西1130m、南北650m程の広大な範囲に及ぶこととなった。
3. 道路跡の時期は、SX2600南北道路跡とSX3000・2900東西道路跡が8世紀第2四半期頃には機能していたと考えられ、その他の道路跡についてもこれと同時期に成立していた可能性が考えられる。また、10世紀前葉までには廃絶している箇所もあったと考えられる。
4. 地割内部では、地割を南北に分割する形で南部に長方形の堀を巡らし、建物跡を計画的に配置したり、地割を区画溝で4分割し、建物跡等を配置する状況が認められ、地割内部の様相が多様であることが明かとなった。
5. 区画施設と考えられる土壙状の高まりや整地地業などを東山官衙遺跡と壇の越遺跡の周辺の丘陵上で発見した。これらについては、現段階では性格・年代について正確な知見は得られていないが、本遺跡で発見されている築地堀跡や材木堀跡と一連のもので、東山官衙遺跡の周囲を巡る外郭施設を形成していた可能性も考えられるなど大きな成果が得られた。

註1 40区は2003年度に調査が行われている。調査成果の詳細については未報告であるが、加美町教育委員会の御好意により使用させていただいた。

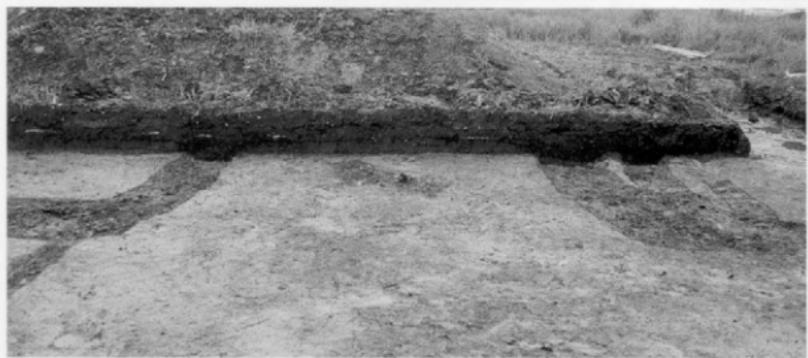
引用・参考文献

- 加美町教育委員会（2004）「壇の越道路第7次調査の概要」『第30回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会
齊藤 蔚（2003）『東山官衙遺跡に伴う方格道路－宮城県加美町壇の越遺跡－』『条里制・古代都市研究』第19号
色麻町教育委員会（1993）『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集
塙館町教育委員会（1991）『伊治城跡』塙館町文化財調査報告書第4集
宮城県教育委員会（1995）『山王遺跡II－多賀前地区遺構編－』宮城県文化財調査報告書第167集
宮城県教育委員会（1996）『山王遺跡IV－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集
宮城県教育委員会（1996）『彦エ門機窯跡』『下草古城ほか』宮城県文化財調査報告書第169集
宮城県教育委員会（2003）『壇の越遺跡』『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第195集

宮崎町教育委員会（1999a）『壇の越遺跡II－平成10年度発掘調査報告書－』宮崎町教育委員会
宮崎町教育委員会（1999b）『壇の越遺跡III－平成10年度発掘調査報告書－』宮崎町教育委員会
宮崎町教育委員会（2003）『壇の越遺跡IV－平成11年度発掘調査報告書－』宮崎町教育委員会
宮崎町史編纂委員会（1973）『宮崎町史』



SX2600・3000交差点（南から）



SX2600断面（北から）



39A区全景（東から）



SX3000北側断面（西から）



SD2606断面（東から）



SD2610（南から）



39E区全景（南から）



SD2621・SX2600東側溝接続部



SX3000（東から）



SX3000北側断面（東から）



SX2900道路跡南側倒溝（東から）



SX2900道路跡南側倒溝断面（東から）



SA2615 (西から)



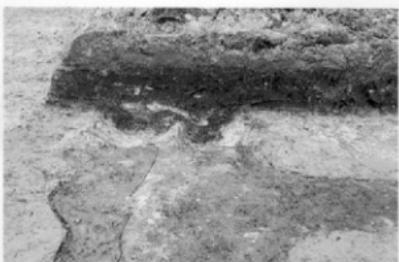
SA2615縦断面 (南から)



SA2615横断面 (西から)



39F区東部 (南から)



SD2621断面 (東から)



SD2623 (北から)



39G区全層 (東から)



SB2618 (南から)



SB2611 (東から)



SB2636 東妻北から 2番目柱穴 (北西から)



SB2636 (西から)



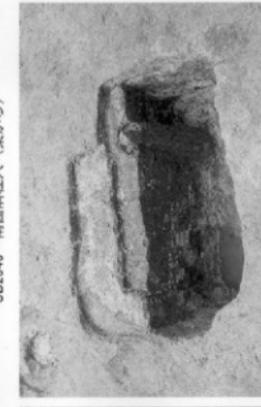
39G区南側SB部（南から）



SB2640（西から）



SB2640 北西隅柱穴（南東から）



SB2640 南西隅柱穴（東から）



SB2638 南西隅柱穴（西から）



SB2638 東辺中央柱穴（東から）

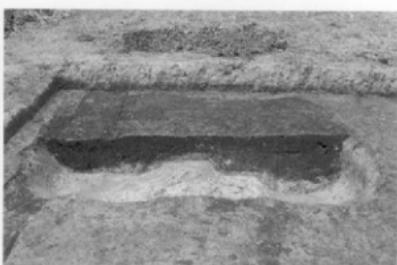


SB2635 南東隅柱穴（南から）

SB2637 北東隅柱穴（南西から）



SK2617断面（西から）



SK2645断面（東から）



SK2641（西から）



SK2641断面（西から）



SK2642断面（南から）



SK2644断面（東から）



SK2643断面（西から）



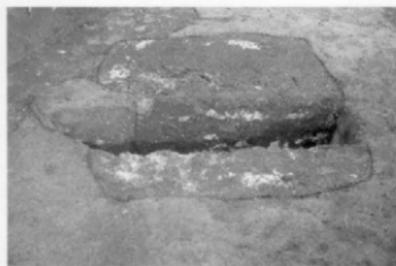
391区全景（南から）



T41建物跡（南から）



T42全景（南から）



T42柱穴断面（南から）



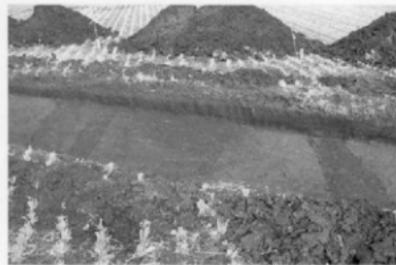
T43南端柱穴群（西東から）



T44SX3100南北道路跡（南から）



T45SX1900・3100道路跡交差点（西から）



T46SX3300南北道路跡（南から）



T47全景（東から）



T52SX3200南北道路跡（南東から）



T51全景（東から）



T52建物跡（南東から）



T53全景（西から）



T57溝跡（南から）



T57溝跡断面（南から）



T60土壤・溝跡（南西から）



T58全景（南東から）



T64全景（西から）



T62全景（西から）



T63全景（南から）



E地点から東山遺跡を望む（南西から）



D地点から東山遺跡を望む（南西から）



c 地点西部の土壌状の高まり



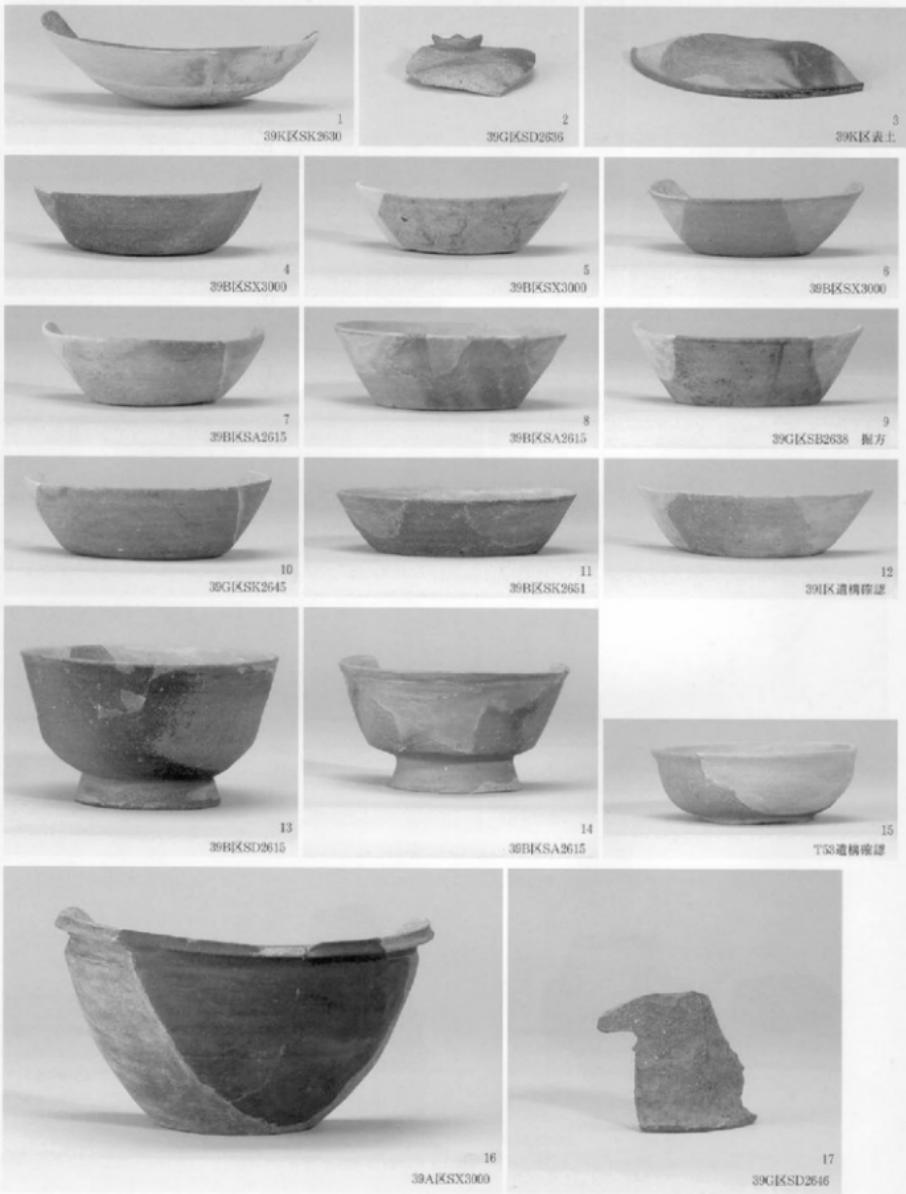
b 地点西部の土壌状の高まり



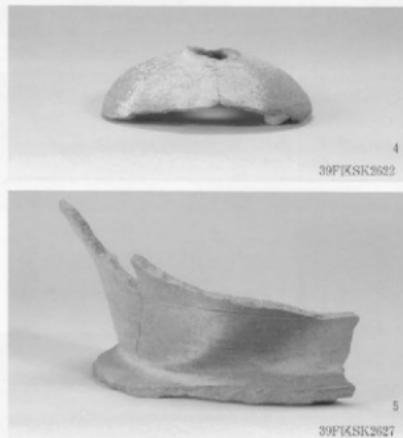
g 地点霧頭北壁



g 地点整地

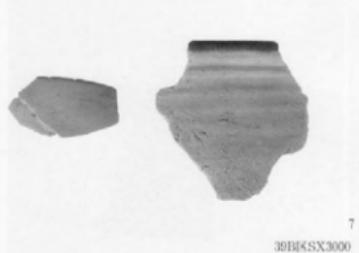


縮尺1/3



3

6



检尺

1~3 : 1/4

4~6 : 1/5

7~8 : 1/3

瑞 岩 寺 境 内 遺 跡

目 次

第Ⅰ章 はじめに	
1. 遺跡の概要.....	59
2. 調査に至る経過と調査の方法.....	60
第Ⅱ章 調査成果	
1. 層序.....	61
2. 発見した遺構と遺物.....	62
第Ⅲ章 考察	
1. 各期の特徴について.....	66
2. 年代について.....	67
第Ⅳ章 まとめ.....	67
引用・参考文献.....	68
写真図版.....	69

調査要項

遺跡名：瑞巖寺境内遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：17099　遺跡記号：ZK）

所在地：宮城県宮城郡松島町松島字町内

調査原因：店舗建設に伴う確認調査

調査主体：松島町教育委員会

調査担当：宮城県教育委員会

調査期間：平成14（2002）年7月17日～23日

対象面積：約800m²

調査面積：約76m²

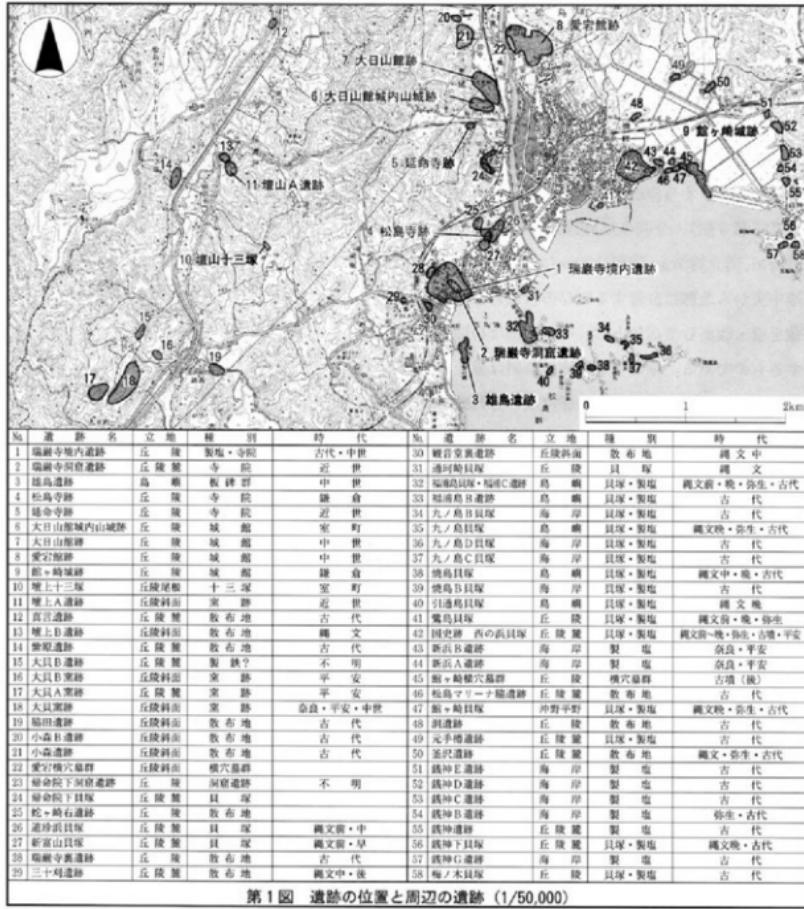
調査員：天野順陽　白崎恵介（宮城県教育庁文化財保護課）

調査協力：新野一浩（瑞巖寺博物館）

第Ⅰ章 はじめに

1. 遺跡の概要

瑞巖寺境内遺跡は宮城郡松島町松島字町内に所在する。本遺跡は宮城県の太平洋岸のほぼ中央にあたる松島湾の北西部に位置し、北西から海に向かって延びる丘陵の端部、標高2~20mの箇所に立地する。遺跡の範囲は、国宝や重要文化財を擁する瑞巖寺伽藍を含む約15ヘクタールで中世の寺院跡として宮城県道跡台帳に登録されているが、遺跡範囲内には瑞巖寺洞窟遺跡（近世）も含まれる。周辺には縄文時代から古代にかけて数多くの貝塚、製塩遺跡等が所在する他、本遺跡と同時代の中・近世の遺跡として、城館跡、寺院跡、塚などがみられる（第1図）。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

また、松島周辺では、十数カ所の石窟群が把握されており（第2図（堀野1993））、今回の調査対象地はこのうち「軒端屋」石窟群の東側に隣接している。

瑞巌寺境内遺跡では、平成3、4年度に瑞巌寺博物館の地下貯水槽の改修や新宝物殿の建設などに伴う発掘調査が実施され（瑞巌寺博物館1993、新野1997）、平成7年2月には今回の調査区の南隣接地において店舗建設に伴う発掘調査が実施されている（註1）。

2. 調査に至る経過と調査の方法

今回の調査は店舗建設に伴うものである。調査対象地は遺跡の南西部、国道45号線がクランク状にカーブする箇所より北西約50mの地点である（第3図）。今回の店舗建設計画は、東西約32m、南北約25m、面積約800m²の敷地内の、敷地中央から北側に位置する既存の古家および石蔵を増・改築して店舗とし、その南側は庭園とするものである。増築する建物の基礎は盛土内に納まる設計で、遺構への影響はないとの判断されたが、平成7年に実施された今回の対象地の南隣接地における発掘調査の際には、周溝を伴う礎石建物、土壤などが検出されており（註2）、今回の調査区でもこれらの遺構の続きが検出されるものと予想されたため、確認調査を行うこととした。

調査は建物や南側に位置する井戸などを避けるようにして、2本のトレンチを設定して実施した（第4図）。その結果、第1トレンチでは地表から深さ約110cm掘り下げたところで、黄褐色砂礫層を確認したが、その面で遺構や遺物は確認できず、著しく水が湧いてきたため、それより下層の調査は行わなかった。

第2トレンチでは、調査区の東半は大きく削



第2図 松島周辺の石窟の分布（堀野1993より）



第3図 調査対象地の位置 (1/5,000)

平を受けていたものの、自然堆積層と整地層が相互に層を成している状況が確認でき、地山岩盤を掘り込んだ跡や、切石、切石列、切石群など、切石を使った遺構が整地層に伴って発見された。

これらの遺構の平面図を作成するにあたり、第2トレーニングでは調査区付近に任意の測量基準点を2点設置し、それを基準に造り方測量により縮尺1/20の平面図を作成した。また、遺構が確認されなかった第1トレーニングの調査区の位置と、任意に設置した第2トレーニングの測量基準点の位置は、繊維製巻尺を用いて、敷地内の地上物を基準にしたオフセット測量を行い、縮尺1/250の工事用現況実測平面図に記録した。水準測量は調査区から約90m離れた地点に設置されている一等水準点を使用した。土層断面図は縮尺1/20で適宜作成した。記録写真は35mmカラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラを用いて撮影した。

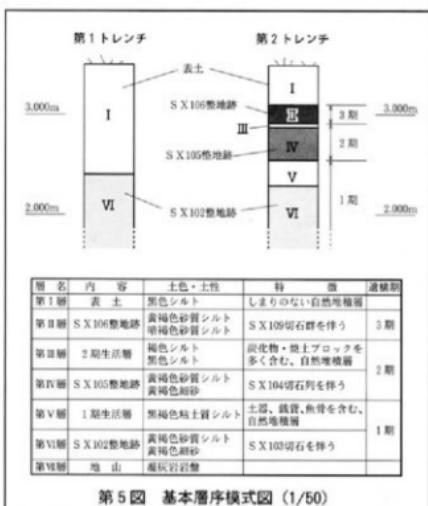


第4図 調査区位置図 (1/500)

第II章 調査成果

1. 層序

調査対象地の層序は、最も堆積状況の良好な第2トレーニングの西壁において観察したところ、表土から地山岩盤まで自然堆積層と整地層が7層に大別できた(第5図)。第I層は表土である。第II層は整地層でありS X106整地跡とした。第III層は炭化物や焼土ブロックを多量に含む自然堆積層である。遺物は出土していない。第IV層は整地層でありS X105整地跡とした。第V層は土器、錢貨、魚の骨片などを含む自然堆積層である。第VI層は整地層でS X102整地跡とした。第VII層は凝灰岩の岩盤で、いわゆる地山である。各層の特徴は第5図に示した通りである。



第5図 基本層序模式図 (1/50)

今回の調査では、整地層を境として、整地とそれに伴う遺構、およびその後の生活層である自然堆積層を一つのまとまりとして捉えることができた。そこで、古いものから第VI層のS X102整地跡とそれに伴う遺構群およびそれらの遺構の機能時の自然堆積層である第V層を1期、第IV層のS X105整地跡とそれに伴う遺構およびそれらの機能時の自然堆積層第III層を2期、第II層のS X106整地跡とそれに伴う遺構群を3期と設定し、以下この各期ごとに内容を記すこととする。

2. 発見した遺構と遺物

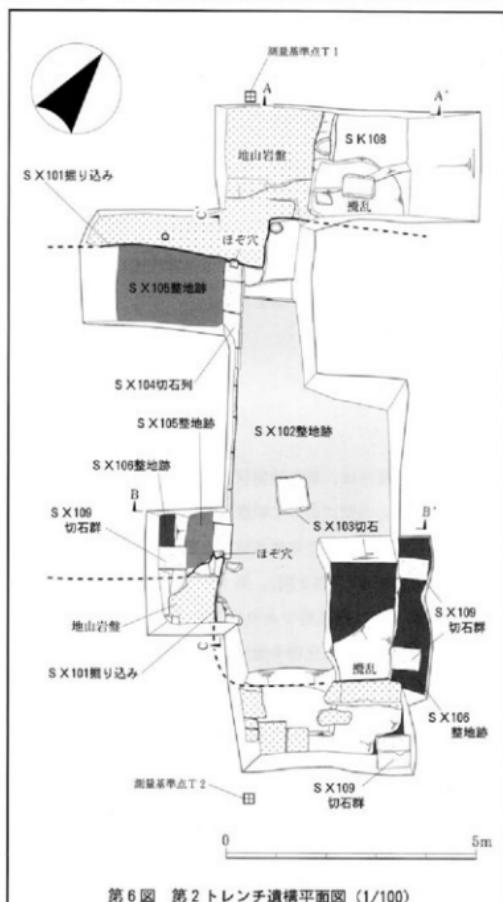
第1トレーニングでは前述したように、地表から深さ約110cm掘り下げるところで、第VI層のS X102整地跡が調査区全面に分布するのを確認したが、これに伴う遺構を発見することはできず、遺物も出土していない（写真1）。そこで、ここでは第2トレーニングで検出した遺構等について、1～3期の順に概要を述べる。なお、遺物が出土した自然堆積層についてもここで触れることとする。

（1）1期

【S X101掘り込み】

調査区の北半部および南半部において、地山岩盤を周辺よりも一段低く掘り込んだものである（第6図、写真4・6）。調査区が西に張り出した箇所で掘り込みの北辺と南辺の一部を、また調査区南東隅付近で掘り込みの南辺をそれぞれ検出した。西側に向かって岩盤が掘り込まれているが、東側の状況は不明である。

掘り込みの範囲は南北8.3m以上、東西6.0m以上にわたる。掘り込みの深さは、調査区北寄りで掘り込みが北へ張り出す箇所では周囲より約50cm下がったところで底面の岩盤が露出しているが、それより南の部分では、さらに段状に30cm以上掘り込まれている（写真



第6図 第2トレーニング遺構平面図 (1/100)

4)。調査区南寄りで掘り込みの深さは約80cm以上である。掘り込みはほとんどの箇所でほぼ垂直に掘り下げられており、掘り込んだ面には工具を使用したとみられる痕跡が確認できた。

【S X102整地跡】

S X102整地跡は S X101掘り込みの内側で確認できた整地跡のうち、最も下層にあたるものである(第6・8図)。整地土は黄褐色砂質シルトもしくは黄褐色細砂でややしまりがある。整地層の厚さは40cm以上である。遺物は出土していない。なお、第1トレーニングでもこの整地層が確認されており、調査区の東西に広く整地されたものとみられるが、第1トレーニングまで先述の S X101掘り込みがおよんでいるか否かは確認できなかった。

【S X103切石】

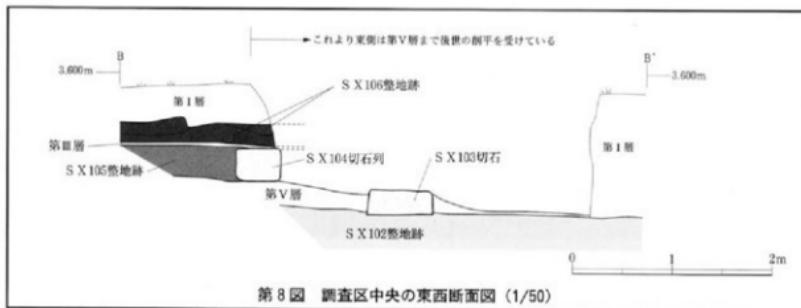
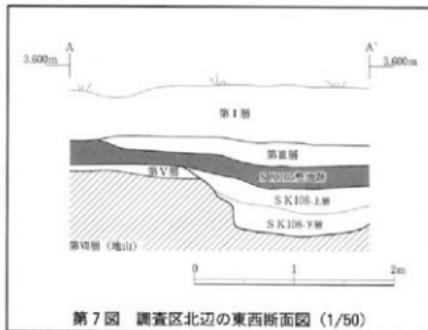
調査区の中央に位置し、S X102整地跡の上面に平らな面を上にして置かれている切石である(第6・8図、写真3)。石の材質は凝灰岩で、大きさは上面が一辺60~70cmのほぼ正方形で、厚さは約25cmである。石の側面4面には工具による加工の痕跡がみられた。

【SK108土壤】

調査区北壁際で確認した(第6図、写真5)。第V層を掘り込んでおり、S X105整地跡に覆われている(第7図)。土壤の南半は後世の擾乱で壊され、北、東半は調査区外のため、土壤全体の形は不明である。規模は東西1.8m以上、南北1.0m以上で、確認面からの深さは約70cmである。堆積土は2層に大別でき、上層は凝灰岩の小礫を少量含む暗灰黄色砂質シルト、下層は凝灰岩小礫を少量含む黄褐色砂質シルトで、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。

【第V層】

第V層はS X102整地跡の上層に堆積する自然堆積層で1期の生活層である。遺物は手づくねのかわらけ皿(写真13-9)、在地産陶器甕、常滑產とみられる陶器甕(写



真13-10) の各破片、マグロ属の左歯骨片(註3)(写真13-11)および銅錢貨(写真12-1~7)などが出土した。このうち、かわらけ皿のナデ痕跡は一段である。常滑産とみられる陶器甕は全体に薄手であり、外面にハケ目の調整痕が見られた。また内面には研磨面がみられ、硯等に転用されたものと考えられる。錢貨は堆積層中から7枚が重なり密着した状態で出土した。

(2) 2期

【S X104切石列】

調査区の西辺中央部で、凝灰岩の切石列を検出した(第6・9図、写真4・6)。これらは第V層の上面に直接据えられ、S X105整地跡によって側面が固定されていた(第8図)。約5.9mにわたって9個の切石が南北方向に上面をほぼ水平に据えて並べられていた。切石1個の大きさは、幅約35cm、高さ約35cmで、長さは65cmほどのものを中心に、62~75cmとややばらつきが見られる。北端の切石は長さが約35cmと短く切り詰めてあった。石の側面には工具による加工痕跡を残すものもみられた。また、北端と南端の切石には、ほど穴が穿たれていた(写真7)。この穴は、切石の端部とその端部がある地山岩盤とが掘り込まれているもので、穴の大きさは一辺約15cm、穴の深さは北端部で切石上面より28cm、南端部で切石上面より39cmであった。

【S X105整地跡】

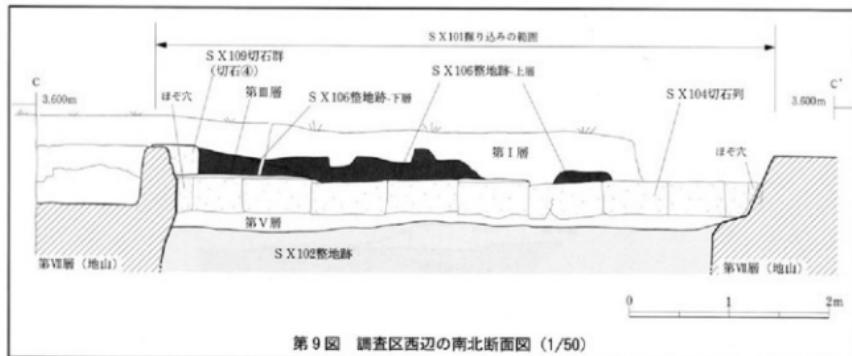
調査区の西側の拡張箇所にあたるS X104切石列の西側と、調査区北端のS K108土壤の上面で確認された(第6・7図)。本来は調査区の中央まで分布したものと思われるが、後世の削平を受けており、部分的な確認にとどまった(第8図)。

遺物は縄文土器、在地産陶器鉢(写真13-12)、在地産陶器甕、常滑産陶器甕(写真13-13)、丸瓦(写真13-14)、平瓦の破片などが出土した。

(3) 3期

【S X106整地跡】

調査区の南半部の西端および東端で部分的に確認した(第10図)。S X109切石群の切石上面と高さを据えて土が積まれていることから、S X109切石群の切石に伴う整地とみられる(第9図)。整地土は大きく2層に大別でき、上層は黄褐色砂質シルト、下層は暗褐色砂質シルトである。遺物として在



地産陶器甕の胴部破片が出土した。

【S X109切石群】

調査区南東部で南北に並ぶ3箇所、さらに調査区南西の拡張部分で1箇所、合計4箇所で切石を検出した(第10図、写真8)。これらは各切石の上面がほぼ同じ高さであることや、相互に規則正しく並ぶような位置にあることなどから、ひとまとまりの切石群として捉えた。以下、各切石の位置を示すために便宜的に北東の切石から右回りに、切石①、②・・・・④と呼称する。

切石の大きさは、切石①、②、④は長辺約60cm、短辺約45cm、厚さ約25cmの凝灰岩で、色調が白っぽいものである。切石③では長辺約65cm、短辺約30cm、厚さ約22cmの黄色っぽい凝灰岩が横に2個接するように並べられていたが、さらにその隙間にはモルタル状のものが詰めてあった(写真9右)。このような細工は切石④のすぐ南側でも確認でき、黄色っぽい凝灰岩切石2個が切石④に接して置かれており、これらの隙間にもモルタル状のものが充填されていた(写真9左)。

切石間の距離は、石のほぼ中心で計測すると、切石①-③間は約3.6m、切石①-②間および切石②-③間が約1.8m、切石①-④間は約4.8mである。

切石①～④はS X106整地跡に伴って置かれたものとみられる。切石④の部分ではこの切石とほぼ同じ大きさで地山岩盤が掘り込まれている状況が確認できた。ただ、切石①～③の周囲には、通常石を据えるために掘り込まれるような掘方は確認できなかった。このような切石、整地土、地山の関係から、(1) 地山を掘り込んで石を据えた後に整地をした、(2) 整地をした後に切石とほぼ同じ大きさの掘方を地山まで掘って石を据えた、の2通りの工程が想定できる。

(4) 第I層の出土遺物

在地産陶器甕口縁部(写真13-15)、在地産陶器擂鉢の口縁部破片(写真13-16)や瀬戸産陶器水注の破片(写真13-17)、瓦、錢貨(写真12-8)などのほか、近世、近代以降のものとみられる陶器片、磁器片などが出土した。

第三章 考 察

今回の発掘調査では、岩盤の掘り込み、整地跡、切石の遺構、土壌などを検出した。それらの遺構および層序の重複関係を整理すると第11図のようになる。ここでは、各期の特徴やそれらの年代について検討する。



第10図 S X109切石群平面図(1/100)

1. 各期の特徴について

今回の調査では層序を観察した結果、整地層を指標として、各遺構を3時期に分けて整理できた。ここでは、各期の遺構についてまとめ、若干の検討を加える。

(1) 1期

遺跡の概要で触れたように、調査区のすぐ西側には「軒端屋」石窟群（第2図の図中F）の石窟が掘り込まれている（写真2）。S X101掘り込みの北辺および南辺の延長線は、西側の石窟の北端および南端にそれぞれほぼ一致している。このような両者の位置関係から、S X101掘り込みは背後の石窟の床面を造り出したものと思われる。S X102整地跡はS X101を掘り込んだ後にその周辺に施された整地であり、その範囲はS X101の東約20mにまで広くおよんでいる。

そして、これらの遺構が築かれた後に堆積した第V層の生活層からは、陶器甕やかわらけ皿などとともに魚骨、錢貨などが出土している。

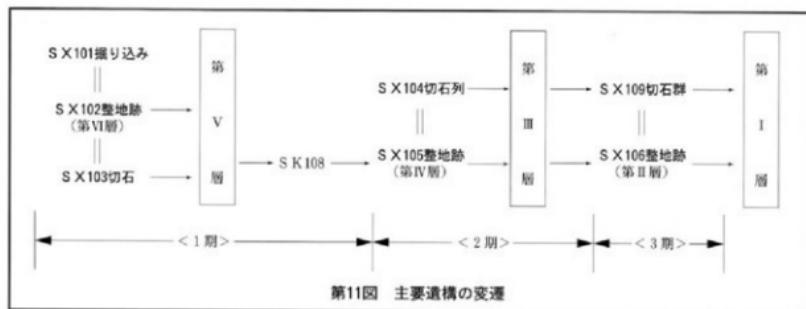
(2) 2期

S X104切石列は、S X101掘り込みの幅が一段狭くなる部分を塞ぐようにして、細長い切石が一列に並べられたものである。この状況は、今回の調査区の南約250mに位置する「真山地蔵堂」石窟群の石窟入口部に並べられている切石列に類似している（写真10）。このような例から類推すると、S X104切石列は1期の段階で掘り込まれた石窟を利用して、2期の段階になって石窟入口に切石を並べたものと考えられる。現在、石窟の奥行きは3mほどであるが、S X104切石列が石窟の入口だと考えると、旧来にはもう少し東まで崖面がせり出していた可能性も想定できる。

また、S X104切石列の両端に穿たれているほぞ穴について、中世の石窟と考えられている県内利府町所在の「音谷穴薬師」において石窟の前面に建物が建てられている例（金森1992）や、仙台市所在の「東光寺遺跡」の6号石窟において石窟入口に扉が取り付けられていた例（仙台市1988）などを参考にすると、S X104切石列のほぞ穴は、石窟の前面に建てられた建物の柱穴や石窟入口に設けた扉の支柱穴などの可能性が考えられる（註4）。

(3) 3期

3期の遺構として検出したS X109切石群の切石は相互に規則正しく配置されている。このような状況から、建物跡の礎石もしくは、切石どうしをつなぐように土台を廻し、その上に柱を立てるよう



な建物が建てられていた可能性が考えられる。

また別の可能性として、2個並べて置かれている切石が規則正しく配置されていることに着目すると、五輪塔などの石塔では、その基礎部分に切石を2～数個並べて基壇石としており（写真11右）、それら規則正しく並んでいる例（写真11左）が参考になる。このような例からこの切石群はこのような石塔の基壇石である可能性も考えられる。

ここではSX109切石群の性格として上記2通りの可能性を考えておきたい。

2. 年代について

(1) 1期

1期の遺構群の年代を考えるにあたって、1期の生活層である第V層から出土した遺物のうち在地産の陶器甕について注目する。

在地産陶器に関しては、これまで宮城県北部では13世紀中葉頃から（飯村：1995）、また、宮城県南部の白石系窯跡群の一本杉窯跡では13世紀後半頃から（宮城県教育委員会：1996）陶器生産が行われていると考えられており、14世紀後半以降には陶器の生産は見当たらなくなることが指摘されている（高橋：2002）。上に挙げた第V層出土の陶器甕の他、SX105整地跡から出土した陶器甕や擂鉢、SX106整地跡から出土した陶器甕なども、いずれも13～14世紀頃に生産されたものと考えられる。そしてこの年代観は同じ第V層から出土した手づくねのかわらけ皿の年代観とも矛盾しない。これらのことから、1期の遺構群の年代は13～14世紀頃と考えられる（註5）。

(2) 2期

2期のSX105整地跡の整地土から出土した丸瓦は表面が焼し焼成され、凸面は磨いたように平滑で、凹面には布目が観察できる。これらは、これまで瑞巖寺境内遺跡で発見されている瓦のうち、近世の瓦の特徴に類似している（註6）。従ってSX105整地跡をはじめとする2期の遺構群の年代は近世頃と考えられる。

(3) 3期

3期のSX109切石群の切石の中には、先に述べたように2個の切石を並べ、その目地をモルタル状の材料で詰める細工がしてあった。このモルタル状の材料の科学的な分析を行っていないため、これがいわゆるセメントモルタル（セメントと砂の混成物）なのか、石灰モルタル（石灰と砂の混成物）なのかを特定することはできない。前者の場合、セメントが国内で生産され普及するのは明治初期ころである（三上：1973）ことから、3期の年代も明治以降と考えられる。一方、後者の場合、石灰の使用は古代まで遡ることができ（山田：1981）、3期の年代は前述の2期の年代に続く近世以降と考えることができる。

第IV章　まとめ

1. 瑞巖寺境内遺跡の南西部の調査を実施した。その結果、整地層とそれに伴う遺構およびその後の自然堆積層を一つのまとまりとして捉えることができ、このようなまとまりを1期から3期まで

の3時期の変遷として確認することができた。

2. 1期の遺構群として岩盤の掘り込みとその内部の整地跡、切石1個と生活層および土壌1基を確認した。このうち岩盤の掘り込みは、調査区西側に位置する石窟の一部とみられる。これらの遺構に伴う生活層から出土した陶器甕などから13~14世紀頃の遺構群と考えられる。
3. 2期の遺構群として切石列、整地跡と生活層を確認した。切石列は石窟入口部に設置されたものとみられる。整地跡から出土した瓦から近世頃の遺構群と考えられる。
4. 3期の遺構群として切石群、整地跡を確認した。この切石群は建物の礎石や土台石である可能性や、石塔などの基壇石である可能性などが考えられる。また、切石群の中には2個の切石が並べられているものがあり、その目地にはモルタル状の材料が充填してあった。この材料の成分如何によって3期の年代が近世以降とも明治以降とも考えられるが、今回の調査ではその特定には至らなかった。
5. 調査区は松島周辺に点在する石窟群の一つにあたる。今回の発掘調査によってこの石窟が中世頃に掘り込まれた可能性があることや、その後近世以降にわたって継続的に人の手が加えられてきたことなどがわかった。

註

- 註1 平成7年に実施された発掘調査については、現在、瑞巖寺博物館によって整理作業が進行中である。
- 註2 前註のとおりであるが、瑞巖寺博物館のご好意でそのときの調査図面等の資料を拝見させて頂いた。
- 註3 出土した魚骨の同定には、本源西村力の協力を得た。
- 註4 例示した菅谷穴彌師の建物や東光寺遺跡6号石窟の扉がいつの時代に設置されたかの考証はなされていないが、ここでは時代を問わず石窟に何らかの施設を設置しようとする意識があることの例として提示した。
- 註5 陶器、かわらけの製作技法、特徴、製作年代等に関しては、多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏にご教示を賜った。
- 註6 瑞巖寺境内遺跡で出土した中・近世の瓦に関して、瑞巖寺博物館の新野一浩氏にご教示を賜った。

引用・参考文献（五十音順）

- 飯村 均 1995「東北諸窯」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 金森安孝 1992「石窟仏と石窟」『よみがえる中世 7』平凡社
- 川鶴政太郎 1981『新版 石造美術』誠文堂新光社
- 瑞巖寺博物館 1993『瑞巖寺境内遺跡試掘調査概報』
- 仙台市教育委員会 1988『東光寺遺跡』仙台市文化財調査報告書第112集
- 高橋博志 2002『陶器生産と陶磁器流通』『鎌倉・室町時代の奥州 奥羽史研究叢書4』高志書院
- 新野一浩 1991『中世円福寺期の瓦』『瑞巖寺博物館年報第十五号』瑞巖寺博物館
- 新野一浩 1997『瑞巖寺境内遺跡—極小の鎌倉—』『月刊歴史手帖』第279号 第25巻1号 名著出版
- 堀野宗俊 1993『瑞巖寺境内に建つ肥後国人吉藩主相良長毎供養碑から』『瑞巖寺博物館年報』第19号 瑞巖寺博物館
- 堀野宗俊 1997『瑞巖寺の歴史』瑞巖寺
- 三上正明 1973『セメント』『建築もののはじめ考』新建築社
- 宮城県教育委員会 1996『一本杉窯跡』宮城県文化財調査報告書第172集
- 山田幸一 1981『壁』『ものと人間の文化史45』法政大学出版局



写真1 第1トレンチ全景（南から）



写真2 第2トレンチとその西側の石室（北東から）



写真3 S X103切石と第V層（南西から）



写真4 S X101掘り込みとS X104切石列（南東から）

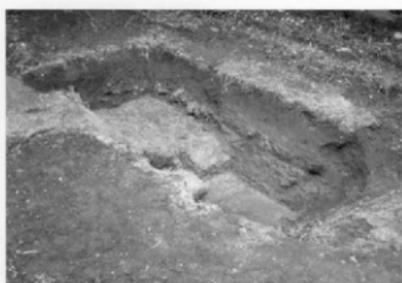


写真5 S K108土塙（南東から）



写真6 S X101掘り込みとS X104切石列（東から）



写真7 S X104切石列のほぞ穴
左：南端、右：北端（ともに東から）





写真8 S X109切石群（北西から）



写真9 S X109切石群の切石
左：切石④（南から） 右：切石③（西から）

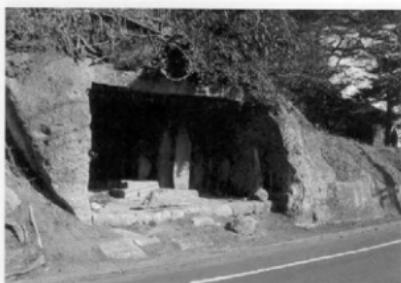


写真10 石窟入口に切石列が設置されている例
(松島町 真山地蔵堂石窟群)



写真11 石窟内部の五輪塔
(松島町 天麟院洞窟群)

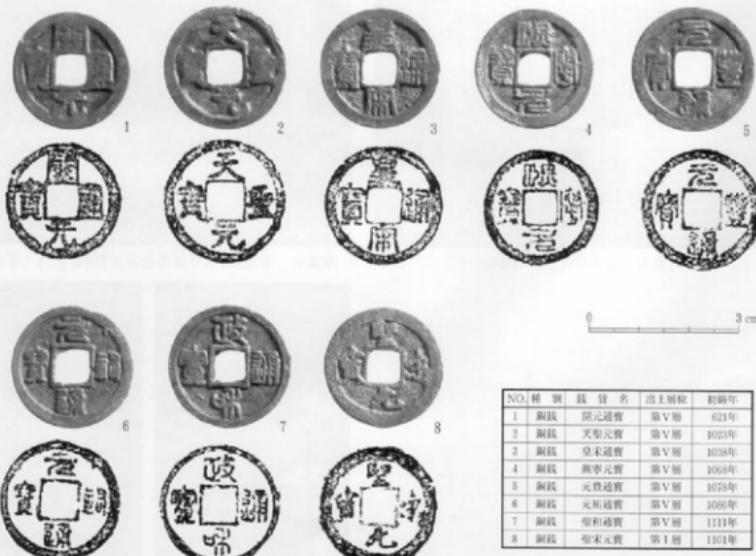


写真12 出土遺物（1） 錢貨 (1/1)

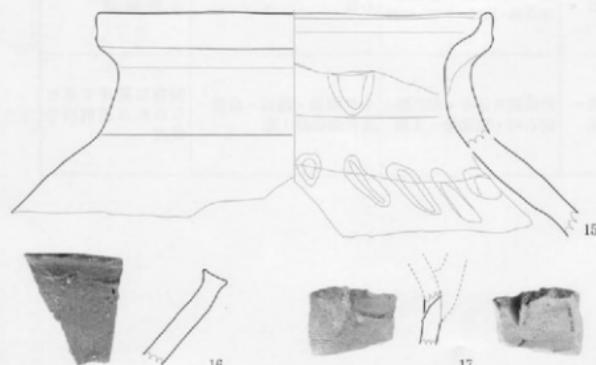


第V層出土遺物



S X105整地跡出土遺物

0 10cm



第I層出土遺物

NO	種別	出土層位	特徴
9	かわら片 皿	第V層	薄口クロコ調、一段ナデ
10	陶器 皿	第V層	全体に薄手、外周ハケ目調拂、内面研磨有り
11	骨 魚骨	第V層	マグロ属、左側骨片
12	陶器 標本	S X105	在地産、内面筋目なし
13	陶器 皿	S X105	常滑產、外周押出有り
14	瓦 丸瓦	S X105	表面磨し施成、内面滑らか、内面磨目有り
15	陶器 皿	第I層	在地産、口部受口状、縁厚め
16	陶器 標本	第I層	在地産、内面筋目なし
17	陶器 水注	第I層	常滑產、口部欠損、外周沈線有り

写真13 出土遺物（2） 土器・瓦・骨（1/3）

報告書抄録

ふりがな	だんのこしいせきほか							
書名	壇の越遺跡ほか							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第199集							
編著者名	白崎恵介・西村力							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL022-211-3682							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
壇の越遺跡	宮城県加美町字 鳥嶋・鳥屋崎	044431 30039	38度 35分 33秒	140度 48分 20秒	20030407～ 20030528 20031114～ 20031205 20040324	2,000 1,600	重要遺跡確 認調査	
瑞巖寺境内 遺跡	宮城県宮城郡松島 町松島字町内	044016 17099	38度 22分 06秒	141度 03分 52秒	20020717～ 20020723	76	店舗建設に 伴う確認調 査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
壇の越遺跡	官衙関連遺跡・集落跡	奈良・平 安	道路跡・木材痕跡・柱列 跡・区画溝跡・建物跡・ 井戸跡・溝跡・土壤・細跡	土師器・須恵器・砥石、 石器	官衙関連遺跡、 方格地割			
瑞巖寺境内 遺跡	寺院・洞穴	中世・近世	岩盤掘り込み・切石群・ 切石列・整地跡・土壤	中世陶器・錢貨・魚骨・ 近世陶磁器・瓦	洞窟に関連すると みられる遺構群を 検出			

宮城県文化財調査報告書第199集

壇の越遺跡 ほか

平成16年3月25日印刷

平成16年3月31日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町3丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
